
Colorful

須王瑠璃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Colorful

【Nコード】

N4333M

【作者名】

須王瑠璃

【あらすじ】

龍に守護された五大陸。

舞台は水龍が守護するイア大陸の、ある王宮。

そこに使える侍女・ルシア。彼女はいたって平和に過ごしたいのに、周りが放っておいてくれない。

ルシアを溺愛する美形王子に、愛に生きる王女。暴走護衛に嘘つき護衛。

そんな人達に囲まれた彼女の平凡(?)で色とりどりの日常小話。

「王子様とのラブロマンス?滅相もございませんわ!」

ラブコメディを目指します！今のところどうなるのかわからないけれどR15指定しておきます。だって王子が・・・。
連作っぽい作りになっております。

問題王子（前書き）

御覧下さりありがとうございます。
初めて小説を投稿してみました。
お気に召しましたら幸いです
それでは、どうぞ。

問題王子

春もつららか。生い茂る木々の緑の隙間からこぼれ落ちる暖かな陽光が気持ちよく、心地よい眠気を誘うような午後のこと。

「あの、腕をどけてはくださらないでしょうか・・・？」
「なぜ？」

恐る恐る相手の機嫌を伺うような声音と、それに対照的に相手の反応を面白がるような声音。人気のない図書室に響く少女の声と少年の声。

「あの、あの・・・私、別にお仕事もございますし、そろそろお暇しませんと・・・」

「僕の相手も立派な仕事の内の一つだと思っけど？」

「え?! いえ、そんな! 滅相もございません! 私なんてそんな!」

「昔は一緒に遊んだじゃない」

「それは小さい頃の話で・・・」

今はそんな無邪気な事が出来る年齢ではないのです! わかってくださいませ!

終わることのない押し問答に、少女は泣きなくなつた。

少女は壁を背にして立っていて、その両側を少年の腕によって囲われていた。少女の体に触れるか触れないかの微妙な距離で壁に手をつかれているものだから、少女は動きたくても動くことができない。斜め上でかがみこむように顔を寄せている少年の方を真っ直ぐに見ることもできず、彼女はひたすら視線をそらして俯くことしかできなかった。

それが気に入らないらしい少年は、俯く彼女の耳元に唇を寄せて吐息とともに囁く。

「ねえ・・・ルシア・・・？」

ルシアと呼ばれた少女は面白いくらい体を揺らすと、硬直しながら細い声で答えた。

「は・・・はい」

「仕事と僕と、どっちが大事なのかな？」

そのお言葉は、仕事を理由に疎遠になっている夫に向かって寂しい妻が問いかけるものではないのですか！！

心の中で絶叫しつつ、ルシアはフルフルと首を左右に振るだけで答えない。答えられるはずもない。ここで仕事が大事だと言えば角がたつし、かといって目の前の少年の方が大事だと答えれば、なにやらわが身に危険が迫るような気がするのである。

ああ・・・どうしてこんな事に・・・。私はただ図書室のお掃除を言い付かっただけなのに。

にっちもさっちもいかず、少女はただただ足下を見つめ、この場面をどうやってやり過ごすか、あるいは誰かが救いの手を差し伸べてはくれないだろうか、淡い期待を抱くのであった。

* * *

ルシア・ガーラント。

それが彼女の名前である。

水龍が守護する 水の樂園 イア大陸では一般的な栗色の髪と翡翠色の瞳を持った小柄な少女だ。肩の下あたりで揃えられた柔らかな髪が、彼女の少し丸い顔の輪郭をふんわりと包み込み、アーモンド型の瞳は瞳孔が大きく、まるで子犬のような印象を見るものに与える。少し厚めのふつくらとした唇が、更に愛らしさを添えていた。美人とはいかないまでも、十分可愛らしいといって差し支えない少女である。

彼女は、イア大陸で一番大きな国家であるランデイスの王宮に、十歳の頃から侍女として勤めている。

ルシアの家は平民ではあるが、昔の大戦で曾々祖父が立てた武勲によってランデイス王の覚えがめでたく、また彼女の兄であるトルア・ガールアントが最年少で王族の近衛騎士になった為に、働き場所としては願ってもない花形職である、王宮付きの侍女という仕事を得る事ができた。

王宮付きの侍女という職は、身近に上級貴族や王族達と触れ合える上に、最上級の教育を受けられるということで、大変な人気職となっており、その倍率はかなり高い。

また上流貴族の目に留まることができれば、それ相応の豊かさを得ることができる。これには本人だけではなく、娘達の親達も大きな期待を寄せていて、それがまた競争率の高さに拍車をかけている理由でもあった。

そんな人気の侍女職についてから早六年。

住み込みの為、最初は優しい両親と、賢く強い兄や可愛い妹と離れた事によって寂しさを感じていたものだが、今では多少の失敗はあるものの、ルシアも立派に仕事をこなせるようになった。

まだ若い彼女には大きな仕事は任せてもらえないけれど、どんな小さな仕事でも完璧にやり遂げて、コツコツと経験を積んでいこうと目標を掲げている。

だというのに。

「ねえ、ルシア。答えて？」

目の前の少年は、ことあるごとにルシアの邪魔をしてくるのだ。

襟足まで伸びた艶やかな黒髪、陶器のような滑らかな肌に、形よく整った鼻と唇が、絶妙なバランスで配置されている。二重の瞼と、けぶるような長い睫に縁取られた瞳は吸い込まれそうな深海の青。見ているだけでうつとりするような、けれど心のどこかでその魅了の力を恐ろしく感じるような美貌の少年。

彼の名はラーグ・ウル・イリュデシア・ランデイス。

その美貌で名高いランデイス国の第三王子その人である。

「こ・・・困ります！本当の本当の本当に困ります！」

ルシアが泣きそうになりながら、一生懸命言っているのにラーグは意に介した風もなく、忍びやかに笑うだけ。

いつも彼は、ルシアが困っている様子を見ては楽しそうに笑う。

ルシアだって純情な乙女の一人である。およそ本当に同じ人間なのかと思うほどの王子の美貌を間近にし、その甘い瞳と魅惑的な声で囁かれれば、心臓はドキドキするし顔だって真っ赤になってしまう。そんなルシアの反応が、王子にとっては楽しくて仕方ないらしい。

これはもう絶対にイジメだと思います！どうして私ばかりなのですか！

言いたい事は山ほどあれど、王族に逆らえるはずもなく、ルシアは心の声で文句を言い募るしかない。もつとも、ラーグの顔を真正面から見る勇気もないのだから、彼が王族でなかったとしても、言い返えせるわけがなかったが。

「何が困るの？簡単な質問じゃない」

ことさらルシアの耳元に唇を近づけて優しく囁く声は、ルシアと二つしか年が違わないとは思えぬほどに色気がにじんでいる。

ああ・・・その色気を少しでもいいから分けてくださいまし！・・・じゃなくて！こんなところで振りまかないで下さいませ！

声には出せない分、ルシアの思考も相当な混乱の域に達していた。

「ラ・・・ラーグ様・・・」

「君は、僕の事をどう思っているの？」

いつまでたっても固まったままのルシアに業を煮やして、ラーグは彼女の瞳と目を合わせるべく、いつそうかがみこむ。

彼の手がそつと頬によせられて、ルシアはギュツと目を瞑った。そうすれば彼のあの瞳を見なくてもすむからだ。あの深い青の瞳を、ルシアは見てはいけないのだ。

「ルシア・・・」

ラーグの囁く声が聞こえて、吐息が唇に・・・。
その時である。

ガチャガチャッ！ガツツ！バターン

突如、静かな部屋に響き渡るけたたましい音。そして・・・。

問題王子（後書き）

御覧くださり、ありがとうございました！
よろしければ、続きも見てくださいますと嬉しいです

暴走イーシャ

「ラーグ様！こんなところで何をしていらっしゃるのですか！」

図書室に勢いよく飛び込んでくる闖入者。肩までの褐色の髪を後ろで一つに束ね、薄い緑の瞳に怒気をにじませた少年が、勢いよく靴音を響かせ、早足で二人に近づいていく。

目じりが下がっていて、本来なら温和な雰囲気醸し出す少年だったが、今は般若もかくやというほどに怒っている。

「会議はとつくの昔に始まっているのですよ?!こんな所で油を売っている暇などありません！」

彼はラーグに向かってまくしたてると、ラーグの肩に手をかけて、ルシアから引き離す。

た・・・助かりました・・・。

と、ようやくラーグが離れてくれて、ホッと安堵の息をつくルシアであったが、彼女から引き離されたラーグは、その美しい眉をよせて不満気だ。

「イーシャ、何故邪魔をするんだ？もう少しだったのに」

先ほどまでとうってかわって、冷たい声。だがイーシャと呼ばれた少年は、そんなことには歯牙にもかけずラーグを睨みつけ、彼に負けず劣らずの冷えた声で言う。

「何故とおっしゃいますか。何故と。だったら、私だってお聞きし

たいものですね！何故貴方は大事な会議が始まっているというのに、こんな場所にいらっしゃるのでしょうか？！」

イーシャは、その細身の体が倍以上に膨れ上がったのではないか、と思わせるほどのオーラを放っている。

「イ・・・イーシャ様。あの、その・・・」

そのオーラに竦みあがってしまったルシアが、恐る恐るイーシャへと声をかけると、

「いえ、ルシアに罪はありません。わかっています。大丈夫ですからね」

彼は打って変わってルシアに優しく微笑んでくれた。そうして再びラーグを睨みつける。

「何故ここにいて？ルシアがいるからに決まっているじゃないか。大体会議に出席しろとか横暴だと思わない？一つの議題に、延々と無駄に討論し続けるだけなんだからさ。」

どうせなら賛成・反対双方の意見をまとめたものを提出してくれればいいよ。僕はそれで十分判断できる」

「貴方が判断できたとしても、周りが納得しません。会議とはそれぞれ意見をぶつけ合って、互いの考えを理解していくものなのですから」

「だから、その理解とやらは僕がいなくてもできるでしょ？むさくるしいオジサン達の中にいるよりも、こうやってルシアと一緒にいる方が、何万倍も楽しい」

ね？とルシアに麗しい微笑みを送るラーグ。更に跳ね上がるイーシ

ヤの不機嫌度。ルシアは引きつった笑みを浮かべ、心中で狼狽していた。

大変です！イーシャ様のレベル二です！

その時彼女は、救いの主に思えた彼が、絶対の破壊者に変貌しつつあることを察したのである。

* * *

イーシャ・ディキンスは、ラーグの付の補佐官であると同時に上級魔術師として王子の護衛も勤めている程の有能な人物であり、その性格は至極真面目で善良だ。

しかし、その普段は穏やかで優しい彼を唯一激怒させることができるのが、この第三王子なのである。

ラーグの執務に対する態度は一貫して不真面目だ。面倒がって、イーシャに仕事を押し付けて逃亡することは、王宮内でも有名な話となっている。

ラーグと違って生真面目なイーシャは、いつも相当な苦勞を強いられており、ことラーグの執務態度となると、人が変わったように厳しくなる。

それはもう恐ろしいまでに。

その彼の怒りのほどを、王宮の人々はレベル一〜三で表している。

レベル一は、まだそれほどの脅威ではないが、注意の必要がある。

レベル二だと防御魔法を唱えつつ逃げ道を確保する必要性があるが、まだこちらの話を聞く耳を持っている分マシだ。

そして最後のレベル三になると、それはもうすぐさまそこから離脱しなければならぬ。

もしくは彼と同じ上級魔術師二、三人で一斉に拘束魔法を唱え、彼の動きを完璧に止めるかである。

宥めようなどと考えてはいけぬ。

もはやイーシャは言葉が通じる状態ではないからだ。

鬼なのだ。悪魔なのだ。

五年前、勉強を嫌がって逃走したラーグに対し、堪忍袋の緒が切れたイーシャが一度このレベル三に到達したことがある。その時は、ラーグが逃げ込んだ王宮の裏手にある森の一部がぼかりとなくなっていた。

当のラーグは、涼しい顔で防御魔法をはり、その場に居合わせたルシアも守ってくれたが、あんな目には二度と合いたくない。本気で死ぬと思った恐ろしい思い出だ。

それから王宮の人々は彼の怒りをレベルで表し、暴走が起らないよう注意しているのだった。

中でも、実際死ぬ目に合わされたルシアは、そのレベルを推し量ることにはぬきんでている。自分の命がかかっているのであるから、当然ではあるが。

そして恐ろしいことに今、目の前にいるイーシャは確実にレベル二だ。

すぐさま逃げ出したい。

しかし、ここで彼女が何とかしないと納まりがつかないという事も、ルシアは今までの経験から十分に学習していた。

「ラ、ラーグ様？」

精一杯気力を振り絞って、なるべく明るい笑顔になるよう心がける。心中は真っ青ではあるが。

「何？ルシア」

「あの、わ、私、お仕事を頑張っている殿方って、とっても素敵だと思います」

「・・・」

「しっかり、お仕事をこなされている方って、輝いて見えますもの。憧れてしまいますわ」

「・・・」

「お、思わず、お慕いしそうになってしまいます」

じつところこちらを凝視するラーグの視線に負けそうになりながら、ルシアはなんとか笑顔を保ちつつ言い切った。

「・・・慕う？」

それまで黙っていたラーグが、ぼそつと呟いた。

「は、はい」

ルシアが肯定した瞬間、ラーグは彼女の手をとり、その甲へ口付けた。

「ごめんね、ルシア。君と過ごしたいのは山々なんだけど、僕には仕事があるんだ。終わったら、またすぐに会いに行くから、寂しいだろうけど少しの間だけ我慢してね」

そして先程までとは違ってかわって真面目な表情になると、凜とした声でそう告げた。

「いいえ。どうぞルシアの事など一切合財構わず、お仕事を頑張ってくださいませ。ルシアも遠くで応援しておりまから」

いらっしやなくて結構です！

とは言えないルシアは、笑顔をひきつらせながら、一部本音を交えつつ見送りの言葉を送る。 そんなルシアに、とろ

けるような笑顔を見せてから、ラーグは優雅に立ち上がり、

「イーシャ！何をしている！仕事だ！会議に行くぞ！」

そうイーシャに言葉をかけると、彼の返事を待たずにそのままの勢いで図書室をでていってしまった。

その変わり身の早さと、一方的に投げつけられた言葉に、イーシャは毒気を抜かれたように深い溜息をつくが、ラーグがやる気をだしてくれたのであれば彼に否やはない。

「ルシア、ありがとうございます。いつもすいませんね」

ルシアは疲れた顔をしながら、いいえと首を振る。

「あのね、ルシア」

遠慮がちにかけられる言葉に、ルシアは次の言葉を予想して鉄壁の笑顔を作り上げた。

「なんでしょうか？イーシャ様」

「いつそのこと執務室にルシアを待機させておけばいいんじゃないかなって思うのだけれど・・・」

この言葉は、ラーグ絡みで何かあった際に毎回問いかけられる言葉だ。

それだけイーシャもあの王子の扱いに困り果てているのだろうが、ルシアだってそんな面倒を見るのは嫌なのである。

「謹んでご辞退させて頂きます」

「でしょうね。うん、わかっていますから。うん。じゃ、本当にありがとうございます」

図書室の掃除をしに来ただけなのに、どうしてこんなにも疲労せねばならないのか。ルシアは世の無常を感じながら、少し残念そうに去っていくイーシャに一礼して、その姿を見送った。

暴走イーシャ（後書き）

御覧下さりありがとうございます！

王子サマは、ルシアに夢中でございますw

えーと、色々とデキる子なんですけど、この時点だとただのおバカさんにしか見えませんねw

嘘つきテイルガ

「まあ！またお兄様がそんなことを？」

図書室での話をルシアから聞くと、部屋の主は可愛い声を尖らせた。部屋の主は、ラナスフィア・ウル・イリュデシア・ランデイス。第一王女であり、母親を同じくするラーグの妹である。

母親譲りの眩い金髪を腰まで流し、魅力的に輝く大きな翡翠の瞳と甘く潤む桃色の唇は、見るものを魅了してやまず、立ち居振る舞いも気品あふれる華やかなこの少女の美しさは、兄と同様に大陸中に轟きわたる勢いである。

4兄弟の末であり、王を始めとして兄弟全員から溺愛されている愛らしい妹姫は、ルシアにとっては多少我儘なところもあるが、すぐ上の兄であるラーグよりはよっぽど常識ある人間だ。

ルシアは年が同じだということで、幼い頃に遊び相手を務め、王女が彼女を気に入ってくれたこともあって今では彼女付の侍女として仕えている。

「ええ。お仕事をしてくださらないとイーシャ様がお嘆きになっておられました」

王女にお茶をさしだしながら、ルシアは苦笑する。

「ありがとう。全く。わたくしのイーシャに迷惑をかけるなんて。本当、どうしてさしあげようかしら」

受け取ったお茶を一口飲んで、ラナスフィアは頬を膨らませると、それに同意するように声が上がった。

「是非、リテロに飛ばしてしましましょう」

そう言ったのは、ルシアではない。それまで王女の後ろに控えていた男性が声を発したのだ。

「他大陸じゃないですか」

いくらなんでも、他大陸まで飛ばすほどだろうかとルシアは首をかしげる。

「リテロには昔から、仕事をしない人に対する訓練所というものがあるのです。

それはもう恐ろしいほど厳しい訓練だと評判なのですよ。それを受けて帰ってきた怠け者達は、皆一様に全うな仕事人間として更生されているのです。もう三度の飯よりも仕事が好きという人種になるんだとか」

「すごいですね！そんな施設があるなんて！」

「あそこは実力主義ですからね。働かざる者、食うべからずというわけですよ」

イア大陸の隣に位置するリテロ大陸は、地龍が守護する実りの大陸だ。守護のおかげで、いつでも温暖な気候を保っているその大陸の人々は、おおらかなのんびりとした気性をしている。

しかし、そんな気性の裏で、そのような厳しい施設を常設しているとは意外としか言えない。

「ね、すごいですよね、姫様」

感心してキラキラとした瞳を向けてくるルシアに、ずっと黙って話を聞いていた王女は一瞬可哀想なものを見る目を向けてから、背後

に控える男を睨みつけた。そして、一言。

「嘘でしょう？」

「はい」

「へ？」

王女に睨みつけられても平然としながら言葉を返す男を見て、気の抜けた声を上げたルシアは、意味を解すると猛然と男を睨みつけた。

「また嘘なんですか！ テイルガ様！ 酷いです！」

「またとはなんですか。失礼ですね。この前言ったのは出鱈目ですよ」

「同じですよ！」

男は褐色の髪をかきあげ、薄い緑の瞳に小馬鹿にするような色をにじませて、ルシアを見やる。

その顔は、イーシャとそっくりではあるが穏やかな雰囲気のエーシヤとはまとう雰囲気は全く違う為、一見似ているようには思えない。

「騙される方も騙される方なですよ？ ルシア嬢はいつも単純でいいじゃない」

「イーシャ様に訴えますよ？」

「俺が悪かったです。すいません」

* * *

テイルガ・ディキンス。

イーシャ・ディキンスの双子の弟で、武術に秀でた才能をもち、そ

の道では逸材であると評判の男だ。

武術だけではなく弁舌にも長けた有能な人物である彼は、王女の護衛として三年前から常に側に控えている。

しかしながら、その性格は温厚な兄のイーシャとは違い、大いに問題がある。

このティルガという男。嘘をつく事を趣味としているのである。

それは他愛のない嘘や作り事めいた事がほとんどであるのだが、時折ひどく信憑性の高い嘘をつくから厄介なのだ。そして、そんな彼の手綱をとることができるのは、兄のイーシャだけという有様。もつとも幼い頃から一緒にいる王女も彼の相手は慣れたもので、イーシャの次くらいに彼の扱いには長けていると自負している。

しかし、よく言えば素直、悪く言えば単純なルシアは、王女と同じように幼い頃から慣れ親しんでいる間柄であるにも関わらず、それこそ毎回といって言いほどにその嘘に騙されてしまう。

なまじティルガがイーシャと同じくらいに博学であるという事を知っているものだから、余計に騙されてしまうのだとルシアは言うが、毎回同じように騙されている姿を見ている王女としては、学習能力はないのだろうかと呆れるばかりである。

「ルシア、いい加減ティルガの言う事は八割が嘘だという事を学習なさいな」

王女は大きく溜息をつく。その言葉に、ルシアはしょんぼりするが、ティルガは聞き捨てならないとばかりに反論する。

「ラナスフィア様、それはあんまりなお言葉です」

「あら？どこが不満なのかしら？」

「俺の言葉は、七割が嘘、一割が悪ふざけ、もう一割がお茶目、最後の一割が真実なのでございます」

「真実は一割だけなんですか？！ティルガ様？！」

「…………。そんな細かい事はどうでもよろしい」

「重要な事ですのに」

「なんだか、無性にイーシャを側に呼びたくなってきたわね」

「申し訳ございません。悔い改めます」

結局のところ、兄に弱いティルガは、大抵の事ならイーシャの名前さえだせば大人しくなる。

同じように問題を起こすラーグとは違って、毎回騙されてしまうとはいえ、ルシアにとっては扱いにくい相手ではない。ラーグの場合は、ティルガに対するイーシャのように、言うことを聞かせられる相手がいないのが問題なのだ。

ルシアはポンポンと言葉を投げあう王女と護衛の為に、お茶のお代わりを用意しながら、そう考える。

そして、今度こそは騙されませんから！と、もう幾度となく誓った誓いを繰り返すのだった。

嘘つきテイルガ（後書き）

後書き お読みくださりありがとうございます
なにやらお気に入り登録もしてもらえて嬉しいです。
登録してくださった方、ありがとうございます〜

本人達はいたって本気

「いつその事、お前とイーシャを取り替えてしまえばいいと思うのだけれど、どうかしら？」

「俺とラーグ様では、よりいつそう問題が増えるだけかと存じます」

「お前ね、そんなに自分をわかっていているなら、どうして改めようとは思わないの」

「これが俺の個性ですから」

「そんな個性、どこかに捨ててらっしゃい！わたくしはイーシャが いいの！」

「そこをなんとか。同じ顔ですし、ほら」

「うっ！顔を近づけないでちょうだい！」

「ほら、この顔はお好きでしょう？そんなに頬を染められて・・・ たまらないのでしょうか？」

「・・・すみません、お二方。なんだかいかかわしいので、止めて頂けますか？」

* * *

ラナスファイア王女のイーシャ好きっぷりは、ラーグのサボリ癖やイーシャの暴走と同じくらいに有名な話だ。

幼い頃からイーシャにべったりだった王女は、ディキンスの双子がそれぞれの護衛となって三年経った今でもイーシャが兄付であることに不満を訴え続けている。

それは勿論、ティルガに問題・・・は若干とはいえなくもないくらいにあるが、不満があるわけではない。

好きな人にいつでも側について欲しいと思うのは、恋する少女にとっ

て自明の理である。

ラーグとラナスフィア兄妹に専用の護衛が定められたのは、三年前のことである。

当然のことながら、専用の護衛をつけるといふ話になった際、王女は強くイーシャを望んだのだが、一人娘の関心をこれ以上買われてはたまらないと王が採用しなかった。

そしてこれもまた当然のことながら、可愛い娘の不興を買った。

それはもう、恐ろしいほどに。

怒り心頭に達した王女は容赦がなかった。

基本、王と顔を合わせない為に部屋からでない。王に呼び出されても、王の前では絶対に笑わない。その上、道端に転がっている石を見るような目と絶対零度の声。

誰がとりなそうと、王女は頑なに王を拒み続けた。そのとりなした相手が、イーシャであつてもだ。

可愛い可愛い、それこそ目にいれても痛くないほどに可愛いがつている娘に、そのような態度を取られてしまった王は、多大なダメージを受けた。王妃と側室達が宥めても、王の嘆きは深く、とうとう床に伏してしまうまでになった。

それでも、王女は断固とした態度を取り続けた。

「もう、こうなれば意地の張り合いですわ」

そう言つて、ルシアを伴つて王の見舞いに訪れた王女の言葉と、あの笑顔をルシアは決して忘れない。

「まあ。お父様。こんなに顔色をお悪くなさつて。大変でしたでしょうっ?」

見舞いに訪れた娘の姿と、その慈愛溢れる言葉に「許してくれるのか」と王は、ほのかに元気を取り戻したかに見えた。しかし。

「たかが娘の態度ごときで、ご心痛になるなんて、よっぽどお体が弱ってらっしゃるのですわ。皆も気がかりに思っております。どうでしょう？お兄様方も、成人の儀を済ませられましたし、早くご譲位あそばしたらいかが？

そうですね！いつそのこと環境の良い場所に移住なさってはどうかでしょう？人里離れた環境の良い場所でお過ごしになられたら、きっとお元気になれますわ。

お父様がお元気になれますのを、わたくし遠くから祈っておりますから」

王女は、それはそれは美しく愛情溢れる笑顔で、そう言った。

それはもう花が咲き誇るように、華やかな笑顔で。

王女の一步後ろで控えていたルシアは真っ青になって固まってしまった。素晴らしい笑顔と可愛い声に彩られた刺々しい言葉のその意味に。

譲位を促すなど、実の娘であつたとしてもあつてはならないもの。しかし彼女の華のような笑顔とその後ろに漂うドス黒いオーラを前にして、彼女を責められる強者などこの場にはいなかった。

後ろにいたルシアが固まったくらいだから、それを真正面から受け止めた王は顔色の悪さを更に増して、言葉もでない有様。

「・・・ひ、姫様つたら、そんなにご心配になっておられたんですね！これはもう陛下には是非とも、お元気になっていただかなくては！ええ、是非ここで！陛下には！お元気に！」

誰も言葉を発すことができないほどに一気に低下した部屋の温度をあげるべく、ルシアは頑張った。

本来なら陛下の御前でなんの許しもなく発言してはいけないのだが、それを忘れてルシアは頑張った。

王女の言葉を塗り替えるべく、「陛下」と「元気」と「ここで」という事を精一杯主張した。

おかげで、かろうじて部屋の空気が温まったものの、王女は鉄壁の笑顔を守り続けた。

そう、この時点では王女が有利であるかに思えたのだ。王はもう瀕死の状態であつたし、王女の態度は頑なであつた。後もう一押しすれば王はその膝を屈するであろうと、誰もがそう考えるほどにこの父娘喧嘩の勝敗は明らかだつた。

しかし、神は王をお見捨てにはならなかつたのである。

不毛な父娘喧嘩の勝敗の鍵は、やはりイーシャ・ディキンスが握つていた。

* * *

「ラナスフィア様は、いらつしゃいますか？」

その日突然、王女の部屋にイーシャがやってきた。

普段であれば、失礼にならないよう来訪の際には事前に連絡をよこしておかなければならない。それまでイーシャがその連絡を忘れたことなどなかったのに、その日だけは違つた。

王女への取次ぎをしながら、その事に思い至つたルシアは、イーシャの来訪の意味を察して溜息がでそうになるのを飲み込んだ。

「まあ！イーシャ、突然どうしたの？」

恋する相手の突然の訪問を、王女は喜んで出迎えた。眩いばかりに輝く笑顔は、どの男も虜にする程の力を持っていた。この時の相手が、イーシャ・ディキンスでなければ。

「ラナスフィア様にはご機嫌麗しく」

急な来訪を詫びるでもなく、彼は王女に優雅に礼をして王女を蕩かすような笑顔を顔に浮かべた。この時点でルシアはすぐに逃げ出せるように静かに入り口へとにじり寄る。

「早速ですが。先日陛下へのお見舞いの件でお話が・・・」

イーシャの言葉を聞いて、王女は瞬時に固まった。あの王の見舞いの時とは全く逆であった。

イーシャは真面目で王家に忠実な男である。とりわけ王には、引き立ててもらった恩義を感じているらし、く常に誰よりも忠実であるうとしている。王女が護衛の件で騒いだ時にも、「王がお決めになったことですから」と懇々と諭し、それが余計に王女の癪に障り彼女の態度をより頑なにさせたわけだが、お見舞いの件に関しては明らかに王女の分が悪かった。

「陛下に譲位をお勧めになったとか？」

「な・・・なんのことかしら？」

「誤魔化しになられませぬよう。私は信賴できる方に教えていただいたのですよ」

「誰かしら？そんな戯言を・・・」

「どなたでも結構です！ラナスフィア様！実の父上様になんということをおっしゃられるのですか！」

往生際悪く逃げようと試みる王女に、彼はそれはそれは怖い顔で詰め寄り、ガミガミとお説教を始める。

ラーグ相手になければ、いくら怒っていてもイーシャの暴走は始まらない事をルシアは知っているので、その火がこちらに飛び火しないよう、こっそりとその部屋を出たのだった。

* * *

こうして専属護衛にまつわる戦いは、王女の敗北で終止符を打たれた。当初の予定通り、イーシャはラーグの護衛に。ティルガはラナスフィアの護衛に。王女だけが未だに不満をもらしているが、この振り分けがもつとも適したものであったと誰もが思っている。

もしラーグの護衛がイーシャでなければ・・・と考えるだけで、ルシアは背筋が凍る思いがする。

そして、三年前の自分の判断が間違っていなかったことを、一人こっそりと胸の内で噛みしめるのであった。

本人達はいたって本気（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

イーシャは王女に対するジョーカー扱いです。

この日の為に、王はイーシャに目をかけていたのです！（嘘）

これでも仲良し

「あら、お兄様」

ラナスフィア王女が、ティルガを連れて廊下を歩いていると、すぐ上の兄であるラーグが進行方向から歩いて来た。それを見て、王女は足を止め兄に向かって優雅に腰を折って礼をする。

「イーシャはどこですか？」

「フィア・・・開口一番それってどうなの？」

呆れたように見てくる兄を見やって、王女は可愛らしく小首をかしげてから

「御機嫌よう。ラーグお兄様。それでイーシャは一緒ではないの？」

見事な棒読みでそう言った。

「もういいよ・・・僕が悪かった。イーシャは一緒じゃないよ。書類を父上の所に渡しに行っている」

「そうですか・・・」

妹の気持ちは十分に知っているのに、ラーグは酷く残念そうに頷垂れる妹の頭を慰めるようになる。

「僕も聞いていい？」

妹と同じように、首をかすかにかしげながら問ってくる兄の聞いたことなどわかりきっている。

つまりは似たもの兄妹。

王女の後ろに控えているティルガは内心で、そう思ったが口を開くことはなかった。

「残念ながらルシアならいけませんよ。わたくしがこれから図書室に参りますので、その準備に向かっておりますから」

「そんなのティルガにやらせなよ」

望む答えが得られなかったラーグは懔然として、ティルガを軽く睨みつける。

「恐れながらラーグ様。俺は護衛ですので、ラナスフィア様のお側におりませんと」

王子に睨まれてもなんのその。涼しい顔をして姿勢を崩さないティルガに、ラーグはムツとしたような顔をする。

「今現在、ルシアが暴漢に襲われていたら、一体どうするの？」

「いえ、一国の王女殿下と一介の侍女の立場を比べると申されましても」

「何？ルシアは大事じゃないって言うの？死にたいんだ？」

その尖った声と、辺りに漂いだした冷氣に、近くにいた人々がぎよつとした顔を向けるが、王女が「なんでもないので。気にしないでちょうだい」と伝えると、ほつとしたように、しかしそれでも足早に離れていく。

「死にたいか死にたくないかと聞かれましたら、それはもう力一杯全力で死にたくない！と申し上げます。けれど、ルシア嬢が大事であると申しまして殺る気満々でございましょう？」

「それもそうだね。確かに大事だと言われても腹が立つかな。うん、残念。どっちにしてもお前は死罪ってことだね」

「身に覚えのない罪で死ぬのは、いささか理不尽ではないでしょうか？」

「そんなのルシアがいなくて傷ついた僕の心を慰めると言えば、軽いものじゃない？」

睨み合う男二人。テイルガは、ふうっとこれみよがしに溜息をつくと、遠くを見つめる目つきになりながら、静かに呟いた。

「古今東西、昔の人々はおっしゃいました。主君に忠義して死を受け入れるか、主君を暗殺して国を乗っ取るか……」

非常に残念です。俺はラーグ様のことは気に入っておりましてのに、兄の次くらいに」

それを受けて、ラーグもにつこりと微笑む。

「うん、僕も残念だよ。僕もお前の事は気に入っていたし。ルシアの何億分の一くらいには。」

あ、後、僕を暗殺しても国乗っ取れないから。まだ上に二人いるからね。是非、頑張つて」

カチャと、お互いの腰の獲物に手を伸ばす二人の頭に向けて、その時、白い織手が振り下ろされた。

「いい加減になさいませ！」

がつん！と小気味いい音とともに、振り下ろされる拳。それは非力な姫君とは思えないほどの、体重のかかった重い拳であった。

「黙って聞いていましたら、延々とくだらないことを！お兄様、ルシアがいらないからってティルガに絡むのはお止め下さいませ！ティルガも、こんな時ばかり律儀に返さなくてよろしい！大体そんな物騒な言葉を残した古人はいません！」

どこまで会話がころがっていくのかと様子を見ていれば、こんなところで剣を抜こうとするとはなんたること！とラナスフィアは一息に怒鳴って息を荒げている。が、しかし。

「いったあ……。フィア、もう護衛いらないんじゃない？」

「いや、俺の存在意義をなくさないでくださいよ。ラナスフィア様はそうおっしゃいますけど、絶対考えた奴いると思うのですけどね俺は」

「お黙りなさい！」

男二人に、反省の色は全く見えない。

イーシャヤルシアがいらない場所でラークとティルガが会おうと、大概の場合口での言い争いから発展して剣を抜きあい、そこがどこであろつと切りあいを始めてしまう。

まあだからといって仲が悪いのかといえば、そうではない。

これが、この二人流のコミュニケーションのとり方であるらしいのだ。ならばせめて口でのやりあいだけに収めておいて欲しいと周囲は切実に思うのだが、二人はお互いになんとかなく顔を合わせると剣を抜きたくなるらしい。

なんとなくで暴れるな！剣を抜くな！周囲の迷惑考えろ！

と貼紙をしてはどうだろうか、一度会議の議題になったとかならなかったとか。まあ、仮にそんなものを貼り出したとしても、全く効果などないと誰もが思っていただろうが。

「そんなにやりたければ、訓練場にお行きになればよろしいのです！」

そんなわけで、王女の言うことはごもつともな話である。

遠くから様子を窺っていた人々が、同意するように首を縦に振り続ける。けれどその中にいる軍人らしき一団は、なぜか難しい顔をしていた。

「それ前にも言われたけど、嫌」

「なぜですか？」

にべもなく却下され、王女は可愛らしく頬を膨らませて兄を睨む。

「訓練場に行きましたら、問答無用でしごかれますからねえ」

ティルガも吐息をこぼしてそう言うが、普段訓練場に行く事など滅多にない王女は意味がわからず、首をかしげてティルガを見やる。

「訓練場には、もはやその主であるといっても過言ではないダルガ將軍がいらつしやるのですよ」

「あのおっさんはティルガの事大好きだからね。姿を現そうものなら、鍛えたくて仕方ないんだよ。ね？」

「いやいや、俺ばかりではないでしょう？ ラーグ様も立派に愛されておいでです」

「僕はルシア以外からの愛なんて、これっぽっちもないよ」

しみじみと頷きあう兄と護衛。

ダルガ將軍といえば、国一番の戦上手の強者として有名である。その大軍をまとめる鮮やかな手腕と、秀でた武力を持つ御年四十三歳

の將軍様が、気に入った人物をスパルタ教育で鍛え上げる・・・という話は、軍人達の間でのみ、まことしやかに流れている非常に有名な話なのだった。

「半端ないから嫌いなんだよ。疲れるしさ」

「そうですね。一度龍と戦わせようと思いましたね」

龍と人を戦わせるなんて正気の沙汰ではない。

力で叶わないのは当然の話だが、大陸を守護してくれている水龍に、大した意味もなく龍に挑んだと知られたら、どんな咎めがあるかわからない。どんな出稽古だ。

知らなかったダルガ將軍の一面を知って、呆然とする周囲を他所に、二人は再び剣を構えあうと、

「だからまあここでやるしかないよね」

「幸い、ここは廊下ですしね」

にやりと笑いあう。

いや、何が廊下だと幸いなのか。

「だから、おやめなさいと言っているでしょう!」

いち早く正気を取り戻したラナスフィアは、再び兄と護衛を殴るハメになったのだった。

これでも仲良し（後書き）

お読みくださりありがとうございます

お気に入り登録してくださる方が増えて、すわ大変だと慌ててガシガシ続きを考えています。

今回の分で、一応自サイトに掲載している分は出尽くしましたので、大変大変（笑）

兄と妹

「それで？結局、お兄様はルシアに何の御用だったのです？」

ひとまずラীগとティルガを押しとどめることに成功したラナスフィアは、気をとりなおして兄に声をかけた。

「ん？別に何も無いよ。ただ一緒にいたかっただけ」

この言葉だけ聞けば、まるで恋人同士のように感じられる。しかしルシアが迷惑だと思っている事を知っている王女にとっては、頭の痛い言葉だ。

「お兄様・・・。ルシアがお兄様の事を、どう思っているのか・・・。ご存じですよネ？」

「うん。悲しいけれど、迷惑がられているね」

「それがお分かりなのでしたら・・・」

「でも困った顔も可愛いよね。たままないな」

うわっ変態だ。ここに変態がいる。

そんな言葉が王女とティルガの脳裏によぎったかどうかはわからないが、確実に二人とも固まった。

「ルシア嬢が可愛らしいのは認めますけど・・・それって歪んでいませんか？」

「へえ。僕に意見するの？しかもルシアを可愛いつて？死にたいの？」

「いえ、死にたいか死にたくないかと聞かれましたら・・・」

「それはさつきやりましたでしょう!」

こちらが真面目に話をしようと考えているのに、いつだってこの兄は、のらりくらりとはぐらかそうとしてしまうのだ。

「お兄様は、ルシアの事を、どう思いになられているのです?」

溜息をこらえて、王女はこれまで幾度となく繰り返した質問を、もう一度繰り返した。

* * *

彼女の兄であるラーグは、幼い頃からなにかとルシアに構っていたが、二年間の領地研修から帰ってきた現在、それが悪化しているように思える。

ルシアに本当に好意があるのならば、ラナスフィアにとっては何の問題もない。

ルシアはお気に入りでもあるし、幼い頃から知っているから、下手な貴族の娘よりもよっぽど兄の結婚相手にはいいと思う。彼女と姉妹になれるのは嬉しいし大歓迎だ。ルシアだって、あれだけつきまとわれれば嫌でも意識しているはずである。今は戸惑っているだけだとしても、兄が本気だとわかれば真面目に考えてくれるだろう。二人にとっての大きな障害といえば、やはり平民だという身分差だろうが、そんなものはどうとでもなる。いやむしろルシアの幸せの為ならば、自分がなんとかしようと思っっているくらいだ。

しかし。しかしである。

当の兄が、何を考えているのかわからないのである。
それがゆえに、ルシアの気持ちも定まらない。

他の兄達とは違い、母を同じくする兄妹であるのに、昔からこの兄の考える事はよくわからなかった。

学業も武術も魔術も、熱をいれてやっているようにには全く見えな
いのに、それがどんなことであれ人並み以上にやってのける優秀な
兄。

その点については妹として誇らしく思っているが、もう一方で、
何かといえば騒動を巻き起こす頭痛の種でもあるのが、この兄だ。

ランデイス王家の兄妹達は、末妹であるラナスフィアを中心とし
て仲が良かったが、上の二人の兄とは年が離れている為、幼い頃は
このすぐ上の兄と過ごす事の方が多かった。その頃の兄は、物静か
であつたと記憶している。

ラーグの乳兄弟であつたディキンスの双子を交えてよく遊んだも
のだが、ラナスフィアが思い返す限り、兄はどちらかというと一人
静かに本を読む方を好んでいたように思う。

緑の木陰に座り、優しくそよぐ風に黒髪を遊ばせながら静かに読
書にふける姿は、幼心にも我が兄ながら絵になる人だと思つたもの
だ。

そんな兄がどうやって現在の姿になったのか。その契機は、やは
りルシアにあると思う。

今でも鮮やかに思い出せる、あの日。

ラナスフィアが十歳、ラーグが十二歳の時。いつものように双子
と遊んでいると、姿の見えなかった兄が一人の女の子の手をひいて
やってきたのだ。柔らかな栗色の髪と大きな翡翠の瞳。特にこれと
いった特徴はないものの、可愛らしく思える女の子。彼女は不安そ

うに辺りを見回しながら、兄に言われるがまま彼女達の輪に入った。

それがルシアだった。

* * *

「どうって……。好きだよ？」

「語尾をあげないで下さいよ。ラーグ様」

「なんでそんな事聞くの？」

「無視ですか」

「本当ですか？」

「うん」

不審げなラナスフィアに、ラーグは綺麗に微笑みかける。

幾度となく繰り返した問い。その度に返ってくるラーグの返事は、いつも変わらない。

その返事を聞いたたびに、ラナスフィアは少し悲しくなる。

なんの臆面もなく、ルシアが好きだというラーグ。

ラナスフィアには、その言葉が信じられない。なんの臆面もないことが、かえって不信を呼ぶのだ。

多分、ルシアもそう思っているからこそ、ラーグの事を疎ましく思うのだろう。

『ラーグ様には、お戯れも程々になさって下さらないと困ってしまいます。一国の王子なのですから』

いつだったか、ルシアがそうこぼした事がある。その姿はどこか寂しげだった。

ルシアはラーグの言葉を信じない。

ラーグの言葉には、真実が感じられないから。

「お兄様がもう少し真面目になって下さればいいのに・・・」

そうしたら、ルシアだってもっとラーグに歩み寄ってくれるかもしれないのに。

「フィア、僕はいつだって真面目なつもりだよ？」

「寝言は寝てから、おっしやって下さいませ！」

憂い顔を見せるラナスフィアに、ラーグはおどけるように言う。
言っているそばから、この態度。妹は、そんな兄の姿に腹が立つて
声を尖らせた。

「じゃあ今から、全てをイーシャに任せて寝に行こうかな」

だが、更に言われたこの言葉で、ラナスフィアは窮地に陥った。

「わたくしの言葉が過ぎましたわ！どうぞ存分にお働きになって！
ルシアにも言われたのでしょうか?!」

「兄に迷惑をかけるのは、止めて頂きたいのですが？」

ふざけてばかりの兄を叱りつけたつもりが、言質をとられて愛しい
人の迷惑になるとは！

俄然焦って、彼に縋りつく王女と不満そうな護衛を見ながら、ラ
ーグは楽しげに笑う。

「じゃあ、可愛い妹の為にもお仕事してこようかな」

「・・・やっぱりまだ終わられていなかったのですね」

ルシアに図書館での顛末を聞いてから、まだそれほど時間は経っていない。

本来であれば仕事をしている時間だろうに、こんな廊下で会うなんておかしいと思ったのだ。大方イーシャが出来上がった書類を届けに行っている間に抜け出して来たに違いない。

「少し休憩しに來ただけだよ。ルシアに会えなくて残念」

冷たい目つきで見てくる妹とその護衛に、ラーグは悪びれもなくそう言う、ひらひらと手を振って元來た道へと歩いて行ってしまった。

「全くもう。不真面目なんですから・・・あつ！」

それを不機嫌に見送ってから、王女は大きな声をあげた。

「なんですか、一体。驚くじゃないですか」

「ごめんなさい。でも聞き忘れていたのよ。あの噂の真相をお聞きしなければと思っていたのに」

「噂？」

首をかしげるティルガに、ラナスフィアは近くに寄るように言う
と、ひそめた声でその耳に囁いた。

「研修に行っていた間の二年間に咲いた噂話の真相をよ」

「ああ、そう言えばそんな事もありましたっけ」

「ありましたっけ、じゃないわ。重大な問題なのよ」

その噂は、今ルシアがもつとも気にしている事なのだ。

ラーグは二年前に、領主の仕事や領地について実地で学ぶ為に城を離れた。

そして彼が領地研修に言っている間の二年間、兄の恋愛遊戯について聞かない日はなかったのだ。研修地から、城都までは相当な距離があるにも関わらず、見事なほどに相手をとつかえひつかえしている様が風の噂として届き、王宮を騒がせた。さらにはその間、ラーグは一切ルシアに連絡をよこさなかったのだ。

それが仮にも好意を持っている相手に対する態度だろうか？散々浮名を流して城に戻り、戻った途端にルシアに猛然と構い出すとはどういう見なのか、血族とはいえさっぱりわからない。

「あの噂の真相もはつきりさせなければ、ルシアが可哀想よ」

王女は兄が去った方を鋭い目つきで睨む。そして更にある事に気がついた。

「ちょっと！あちらは執務室の方角じゃないじゃないの！」

「そうですね」

「そうですねじゃないわ！わかっていたのなら、何故言わないの！」

「いえ、俺も今気がつきました」

しれっとした顔の護衛に、王女は体を怒りの為に震わせながら叫んだ。

「だったら早くお兄様を捕まえて、執務室に連行してらっしゃい！」

あの兄にルシアを任せるのは、よく考えた方がいいかもしれない。

もう何度目になるのかもわからなくなるほど自問自答した言葉が
思い浮かんで、ラナスフィアは痛み出した頭を抱えた。

兄と妹（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

王子と嘘つきがそろっている場で、ストッパーがいないと誰かが必ず貧乏クジをひいてしまいます。

選択肢

イーシャが書類を提出しに行つた際に、まんまと仕事を抜け出したラーグは、手持ち無沙汰に王宮内を歩き回っていた。

すれ違う人々は、道を譲つて彼に一礼する。彼らは、本来なら執務時間中なのではと疑問に思ひはしても、けしてそれを口に出すことはない。王族に対しておいそれと声をかけることなど出来ないという事もあるが、日々王宮に勤める彼らにとって、第三王子が執務時間中に歩き回っている事は日常茶飯事なのである。

ただ、いつ怒つたイーシャが現れるかわからない為に、王子が通り過ぎると彼らの大半が足早になつてそこから遠ざかる。その大半からもれた者は、皆自分の身は自分で守れる者のみだ。

そんな彼らの事情を知っているのかいないのか、ラーグはただ気のむくままに歩いていく。

彼は現在、行き場を失っていた。

ルシアは図書室にいるそうだが、先程妹達にサボっているのがバレてしまったので迂闊には近寄れない。

ルシアに会いにいけないのならば、他に特にする事もないのだが、仕事に戻るのはなんとなく嫌だ。大体今戻ったら怒られてしまう。かといって、どこに行きたいとも、何がしたいとも思えない。

「ルシア。ルシア。ルシア」

ふと、彼女の名前を呟いてみた。そうしたところで彼女が現れるはずもないのだが、少し満たされたような気持ちになる。けれど、彼女がいなかつまらない。

「本当に寝るか」

考えた末に、結局昼寝という案しか思い浮かばなかった彼は、仕方なしにとある場所へと足を向けた。

* * *

「全く」

ルシアは無然とした表情で呟いた。

彼女の視線は、こぢんまりとした東屋に向けられている。

その東屋は、王宮の裏側にある森の中程に、ひっそりと存在していた。

生い茂る木々の緑の中で、くすんだ白色の東屋だけがこっそりと潜められるように建っている様は、一種隠れ家めいたものを感じさせる。

ここは、五年前に暴走したイーシャが穴をあけた場所で、ルシアにとっては死にかけたという思い出の場所でもある。

木々の中にぽっかりと開けてしまったこの場所に、ラーグは東屋を建てさせた。普段あまり人が入らない森の中ほどにある東屋は、ラーグをはじめとした子ども達の大人に邪魔されない遊び場として重宝された。

しかし、成長した現在ではもっぱらここを利用しているのは、昼寝目的のラーグやティルガくらいのものだろう。

侍女であるルシアにとっては、ここは数ある掃除場所の一つとなっている。東屋には劣化防止の魔法と、使用されていない時は周囲を囲うように保護する魔法がかけられているので、実質掃除の必要はないのだが、ルシアは三日に一度程度の割合で掃除をしに訪れている。けれど掃除が終われば他の仕事がある為、ゆっくりと腰を落

ち着けた事はない。

仕事がないにしても、ここは王子が所有する場所だ。幼い頃のよ
うに王族がそばにいるならいざ知らず、侍女風情が勝手気ままに利
用していい場所ではない事をルシアはわきまえていた。

その東屋に彼女が何をしに来たかというと、単純に掃除をしに来
たのではない。掃除ならば昨日やった。今回は、王女の命を聞いて
人を探しに来たのである。

そう。イーシャに仕事を押し付けて、今まさに目の前で眠りこけ
ている王子様を探しに。

* * *

図書室でラナスフィアを待っていたルシアの元に、苦みばしった
顔つきで王女がやってきたのはつい先程の事である。

王女が図書室に行くというので、本の準備や先触れをだす為に、
ルシアは一足先の図書室へと行っていた。しかしあまりに王女が遅
いので、様子を見に行こうかと思っていたところへ王女がやってき
たのだ。その王女の後ろに困惑顔の兵士が立っている事に気づいた
ルシアは、ティルガの不在に首をかしげる。

「姫様、どうされたのですか？ティルガ様は一緒にではなかったの
ですか？」

「ティルガには、今ラークお兄様を探してもらっています」

ルシアの疑問に、王女は忌々しげに返答を返すと用意されていた
椅子に、普段の彼女にしては少々荒い仕草で腰をおろした。

「ラーグ様を？」

第三王子の名前に不吉なものを覚えて、眉間に皺をよせるルシアを見やって、ラナスフィアは表情を和らげると、かいつまんで図書室への道すがらにあった出来事を話して聞かせた。

「本当に根っからのお仕事嫌いであらうしやるんですね・・・まあ存じていましたけど」

聞き終わったルシアは、そう呟いて頭痛をおさえるように額に手をやった。

「わたくしも探してみたのだけれど、見つからなくて・・・。それでね、ルシア」

「ええ、承知しております。私もラーグ様を探して参ります」

溜息がでそうになるのを飲み込んで、主に皆まで言わせずルシアは答えた。

「ええ。悪いけれど、お願いね。お兄様を逃がしてしまったのは、わたくしの落ち度。このままでは、わたくしのせいでイーシャに迷惑がかかってしまう。そんな事、耐えられないわ」

ラナスフィアはそう言うと、悲しげに長い睫毛を伏せた。自分が好きな人の迷惑になってしまいかもしれないと嘆く王女は、儚げで尚いっそう美しい。ティルガの代理として護衛を言い付かったのであろう兵士は、そんな王女に痛ましい眼差しを向けている。

「そんな事になってしまったら、わたくし・・・」

しかしルシアは王女の事をよく知っていた為、同じように労りの眼差しを向けるわけにはいかなかった。それどころか体を硬直させる。

ミシッ・・・

その時、なにかがきしむような音がした。

何の音だろうかと怪訝に思った兵士は周りを見回してから、その音の出所を知って目をむいた。

それは王女の座る椅子からだったのである。

華奢な王女の手が、椅子の肘掛を握り締め、それを力強く握り締めているのだ。

その手に掴まれた部分が、次第に指の形にへこんできているように見えるのは目の錯覚であろうか？

「わたくし・・・」

俯いていた顔をゆっくりとルシアの方に向ける王女は、その美しい顔に華やかな笑顔を咲かせていた。

ルシアはその笑顔を見たことがある。そう、三年前に王の部屋で。

「あなたに、何をしてしまうか、自信がありませんわ・・・？」

硬直しているルシアに、王女は殊更ゆっくりと優しく、そう告げた。

ラーグに直接罰を与えたとしても、あの兄のことだから痛くも痒くもないに違いない。ならば彼に痛い目を見せるためには、ルシアに手を出すしかない。

その事を、ラナスフィアはよく承知していた。彼女とて罪のないルシアに手を出すのに、良心が痛まないわけではないが、兄にコケにされた上にイーシャに迷惑がかかるとなれば話は別なのである。

「肝に銘じておきます・・・」

ああ・・・理不尽・・・。

そうは思っても、王女に言えるわけがない。今まで何度こうやってラーグ関係で、わが身に危険が迫ったか。数えるのも疲れるくらいだ。泣きそうな顔で硬直しているルシアを見て、兵士は彼女に同情の眼差しを投げた。

* * *

そんな経緯があつて、ルシアはラーグを探す羽目になったのだが、彼女にとってラーグを探すこと事態は、さほど難しくない。幼い頃からの付き合いと、日頃の付き合いのおかげで、彼の行動パターンは読めている。心の中だけは昔も今もさっぱり読めないが、行動パターンだけならば彼は至極シンプルだ。

大抵の場合は 彼女にとっては不本意ではあるが 彼女の元へ真っ直ぐやってくるか。

そうでなければ、読書をしているか。

あるいは、どこかで昼寝でもしているか。

この三択しかない。

物事への執着が極端に低い彼は、あまり積極的に他人や物事に関わろうとする事がない。問題児ではあるが人当たりは悪くないし、持ち前の有能さと美貌もあって人望は高い。特に王家の長男が結婚し、次男に婚約者がいる現在は、ご令嬢方から絶大な人気があるといってもいい。

しかし、そういった人々と一見親しくしているようには見えるものの、家族と双子の乳兄弟以外では、ルシア位しか彼から懇意にしている相手はいないのではないだろうか。

「お遊びになる相手でしたら、沢山いらっしゃるようですけれど」

何とは無しに呟いた言葉は、思った以上に自分の胸にささった。その事が腹立たしくて、情けない。

確かに懇意にしている相手はルシア達しかいなかっただろう。二年間の研修に行く前は。

華々しく王宮に舞い込んできた噂の数々を思い出して、ルシアは眉を顰めた。

聞きたくなくても耳に飛び込んでくる、第三王子の秘め事の数々。その都度、聞こえる名は違うもので。

けれど、その全てが戯れであつたと誰にわかる？

そう考えているくせに、同じ名を聞く事が一度もなかった事に、少しの安堵を感じている自分が嫌だった。

私は侍女でしかない。だから、心を揺らす必要なんてない。

そう言い聞かせても、噂を聞く度に動揺する自分が情けなかった。

「ダメダメ！」

危うく暗い感情に支配されそうになったルシアは、大きく頭を振って考えを追い出した。

今は自分の保身の為にも、ラーグを探す方が先である。イーシャが絡んだラナスフィアは本気だ。それは幼い頃からの経験でわかりきっている。昔を思いかえして戦慄し、慌てて目の前のことに集中する。

図書室にルシアがいて、その図書室には近づけないのであれば、ラーグが選ぶのは残りの一つの選択肢のみだ。

二年の間に、その選択肢に遊び相手のところという項目が増えていない事を祈るばかりではあったが、ルシアはひとまずラーグが昼寝に利用しそうな場所からあたってみる事にした。

そうしてこの東屋にて、眠れる王子様を発見したのである。

目の前で静かに眠る麗しい王子の寝顔を拝見するに、自分の考えは間違っていないかった事をルシアは確信し、そして選択肢が増えていなかった事に、我知らず小さな安堵を感じていた。

こうやって眠っていれば、ただただ無害なラーグに溜息がこぼれ、いつそのこと、このまま眠っていればいいのに・・・と思いかけて頭を振る。

「とりあえず起きていただくとして・・・」

今度はどうやって仕事に戻ってもらおうか。ラーグの寝顔を見ながら、ルシアは頭を悩ませた。

選択肢（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

お気に入り登録が30件になっていて、ビックリしました！

引き続き頑張ります！と言いつつ、ちょっとこの先気に入らなくて作り直します；

王子と侍女

頼み込む？

気をひいてみる？

それとも泣き落とす？

はたまた脅す？

怒ってみる？

宥めすかす？

騙す？

今まで散々ラーグに使用してきた方法を、頭の中で巡らせる。

そのどれもが一定の効果は上げるものの、さほど長続きしないものばかりだ。

ラーグは有能だが、自分の興味がわからない事には、とことん集中しない。仕事を溜めに溜めてから、やっと重い腰をあげる。そうして文句を言いつつ、それらを集中して三日程で仕上げてしまうのが常だ。

そんな集中力があるなら、常日頃から発揮していればいいのにと皆が思い、実際イーシャも口をすっぱくして進言してはいるのだが、一向に聞き入れられる気配はない。

たまにルシアが口を挟む事によって、ある程度は集中してこなすものの、やはり飽きてしまうのか、しばらくすると仕事を放り投げてしまう。

小さな子どもではないのだから、仕事くらいきっちりこなして欲しいものである。

つらつらと取り留めのない事を考えながら、無礼だと思いながら

も寝顔を覗き込む。よく眠っているようで、ちつとも起きる気配がない。

下手すれば、女性であるラナスフィアよりも整っているのではないかと思わせる顔は勿論の事、手の形も、その長い指も、しなやかに伸びた腕や足も、ラーグの全てが世界を形作られた天龍に特別に愛されて作られたのだと、皆にそう思わせるだけのものがある。後は中身さえちゃんと作られていれば、言う事なかったのに。

「昔はもう少し、根気がありましたよ、たような気がしますよ」

ラーグを起こさないよう、そっと呟いて溜息を零す。

「えっ」

その瞬間、さつとのびてきた手に腕を捕らえられた。

驚きで目を見張るが、力強く引き寄せられて咄嗟に目を閉じた。背中に温かな腕がまわされて、少し苦しいと感じる程にしめつけられる。

頬にあたる温もりと、聞こえてくる心音。

恐る恐る目を開いてみると、ルシアはラーグの上に抱きつくようにして乗っていた。

急な出来事に驚きすぎて声も出ない。

眠っているとはかり思っていたのに、実は起きていたのか。

彼はまた飽きもせず、こうやって自分をからかうのか。

途端に腹が立ってきたルシアは、ラーグの胸に手を置くと勢いよく顔を上げた。

そこには案の定、楽しげに笑う王子の顔。

「ラーグ様、お目覚めでいらっしゃったのなら、なぜ教えてくださらないのですか！」

怒りに任せて、いつになく強気に自分を見返してくるルシアを見てやっつてラーグは甘く囁く。

「ん？今起きたところだよ？」

その声は掠れていて、確かに寝起きの声のようにも聞こえる。けれどルシアを拘束する腕の力は強く、とても起きぬけの人間の力とは思えない。

だが、もうルシアにはそんな事はどうでもよかった。ラーグが起きたのであれば、後は速やかに執務室に連れて行って、仕事をさせるのみだ。その為には、こんなところで油を売っている暇はないのだ。

「とにかく。お目覚めになられたのなら、早くお離してくださいませ」
「嫌。せつかくルシアを抱きしめているのに、もったいない」

何がもったいないのかさっぱりわからないが、早く離して欲しい。そんな気持ちをこめてラーグを睨みつけるが、彼は一向に意に介した風もなくルシアの頭を撫でてくる。

その青の瞳に、怒った顔の自分が映っている。
そこでルシアは、はたと我に返った。

なんですか！この至近距離！！

怒りで忘れていた羞恥心が突如わきあがり、彼女はラーグを見ていられてなくて顔を伏せ、彼の胸元に顔を隠す。

彼の瞳を、見てはいけなかったのに。

その一連の動作を、楽しく見ながらラーグはルシアの頭を撫で続ける。

「昔はよくこうやってひつついてたよね。ルシアは柔らかいから、気持ちよかったなあ。今も気持ちいいけど」

瞬間、ルシアの顔が真っ赤に染まった。

気持ちいいとか、なんてことを言うのだろうか。この王子様！確かに子どもの頃は、よく彼と手を繋いだり抱きしめられたりしていたが、そんなことは記憶の彼方に追いやっていたというのに！羞恥でフルフルと震えるルシアの髪に口付けが落とされる。

「あんなに仲良くしてたのに。近頃のルシアは冷たいよね」

口付けとともに落とされた眩きは、いつもとは違って硬さを含んだものだった。その声は、日頃優しく響く彼の声しか知らなかったルシアにとって、とても異質に響いた。

「前も素っ気ない時があったけど、今はもっと冷たい」
「ラーグ様？」

怪訝に思っただけ顔をあげてみると、笑みを消した真剣な表情のラーグと目が合う。

その瞳が怖くて咄嗟に目をそむけると、体勢をひっくり返され、先ほどまでラーグが寝そべっていた長椅子に体を押し付けられた。心臓が大きく跳ねる。

え、ちょっと待って！一体、なんで、どうして、どうすれば、この状況？！

頭の中で、言葉がグルグルグルグル回って、声が出ない。

人間の心臓が、一生で脈打つ鼓動の数は決まっているという。

顔！顔が近いのです！ラーグ様！！このままじゃ私、寿命が縮んでしまいます！

体全体に柔らかくかかってくる彼の重さに狼狽したルシアは、無意識に両手をつっぱってラーグの体を少しでも離そうとする。けれどルシアの力がラーグに勝るはずもなく、抱き込まれるようにして顔を覗き込まれた。

「ねえルシア」

「……………」

「ルシアは、僕のことどう思ってるの？」

それは図書室でも聞かれた問いかけ。

結局イーシャが乱入してきてくれたおかげで、答えを言わなくてすんだ問いかけ。

貴方のことをどう思っているのかなんて、私の方が聞きたいくらいです。

戸惑うルシアに、ラーグは手馴れた仕草で頬に手をよせて、彼女の顔をもちあげた。

その仕草が胸に痛い。

目と目があって、ルシアは不意に自分の中が冷たくなるのを感じた。

図書室で腕に囲われた時も。

先ほど引き寄せられた時も。

こうして押し倒されている今も。

下にいる自分を潰さないように、けれど逃がしもしないように重さをかけてくる気遣いも。

その全てに、女性に慣れた雰囲気を探わされて。

胸の内がよどんで、重くなってくる。

この感覚が。

「嫌いです」

静かな声が東屋に響いて、ルシアは我に返った。目の前のラーグは、少し目を見開いて驚いた顔をしている。

「嫌い？どうして？」

そういった声にも、驚きがにじみでている。

意図せず口にしたしてしまった言葉だが、嫌われているということがあるに意外なのだろうか。ルシアにしてみれば、胸に手をあてて自分の行動をよく思い返して欲しいと思う。

なんだか意地の悪い気分になるとともに、今を逃せばもう言えないのではないかと思い、そのまま何も考えずに彼に向けて言葉を続けた。

「私の仕事を妨害なさるところも、お仕事をちゃんとしてくだらないところも、他の人に迷惑と心配をかけて平気でいらっしゃるところも、こうやって不用意に私なんかに触れてしまっ、ご身分をお

考えにならないところも、誠実でいらつしやらないところも、全て嫌いです。嫌いなんです。迷惑なんです。私に構わないで頂きたいんです」

一息に言い切った彼女は、身の内自分で自分に拍手を送った。

とうとう言いました！言ってやりました！

これで気分を害して咎めを受けたとしても、今の爽快感が味わえるなら何度でも言ってやる。

しかし、そんないつにない強気な気分で浮き足だつ心は、次のラーグの言葉と表情に一瞬にして冷えた。

「へえ。ルシアに嫌われてるなんて思ってもみなかったな」

それはそれは綺麗な笑顔が、この上なく恐ろしい。怒ると笑顔になる点は、やはり兄妹。至近距離での笑顔が尚更恐ろしい。

「すごく傷ついたから、どうやって慰めてもらおうかな？」

傷ついたという割に、弾んだその声はなんだ。あらぬところへ伸ばされようとしている、その手はどういうわけだ。

「ちょ・・・ラーグ様！手！手が！」

「んー？手がどうしたの？」

「その！御手が！・・・やっ」

貞操の危機。

押さえ込まれたこの状況で、ルシアは初めて近年まれにみる貞操

の危なさをやつと理解した。

「おやめください！本気ですか？！正気なんですか？！勿論、冗談ですよ！」

「冗談だとおっしゃってくださいまし！」

「失礼だね。僕はいつでもルシアに関する事なら、本気だし正気だよ。冗談なんて塵一つ分もないね」

尚、始末が悪い！

ここは、図書室よりも人が来ない森の中である。第三者による助けなど期待できそうもない。

押し付けられている温もりとその重さ、そして触れてくる手に、落ち着かない頭をなんとか巡らせて、ルシアはこの状況から脱出する術を図って腕を伸ばした。

王子と侍女（後書き）

御覧下さり感謝です！

王子が絶賛セクハラ中です。少しはラブになってきたでしょうか？

侍女の切り札

ラーグは不意に首に回された腕に、ルシアの顔を見ようとしたが、その腕に力をこめられて彼女の方へと引き寄せられた。抗う必要も、抗う気持ちもなかったので、引き寄せられるままに彼女の肩口に顔を埋める。そうして拘束されてみると、どうして彼女がそのような行動に至ったのかわかった。

この態勢では、彼女の体に触れることができないのだ。
一生懸命に彼の動きをおさえようと頑張っている姿が、可愛くて可笑しくてたまらない。

「ルシア？これじゃ動けないんだけど？」

けれど、そんな内心を抑えて、声に不満をにじませてそう言ってみる。

「お動きにならなくていいんです！じつとしていて下さいませ！」

彼女の少し勝ち誇ったような声が面白い。
離して欲しがっていたくせに、じつとしていゝとは。自分が墓穴を掘っているとは、考えも付かないようだ。

「じつとしていいんだ？じゃあ、ずっとこのままでいようか」

ラーグがそう言うと、案の定ルシアは硬直した。顔は見られないけれど、きつと泣きそうな顔をしているに違いない。ルシアの表情を想像して、小さく笑いがもれる。

ルシアからは、ほのかに甘い香りがして心地いい。触れられないのは惜しいけれど、こうして柔らかな彼女を抱きしめているだけで

も十分満たされる。正直「嫌い」と面と向かって言われたのには言葉以上に衝撃があつたが、それもこうしていれば治まる気がする。このままじつとしていれば、再び眠りに落ちそうだった。

「ラーグ様は・・・」

ゆったりした気分でいると、ルシアから小さな声が聞こえた。

「なに？」

「こういった・・・お相手をして下さる方は、沢山いらっしゃるのでしょうか？」

躊躇うようにゆっくりと紡がれる言葉に、ラーグは内心首をかしげる。

「もう私などに構わなくてもよいはずでしょう？」

何が言いたいのか今一つ掴めなかったが、次に続く言葉は容易に想像できた。

「だから、私には構わないで下さいって？ルシア、君って本当に冷たくなったよね」

「お戯れも程々になさらないと大変な事になると、ご忠告さしあげているのです」

「お戯れじゃないんだけど？」

ルシアは昔からこうだ。ラーグが何を言っても、戯れだ、戯言だと信じようとしなない。

ラーグは本当に彼女の事を気に入っているし、側に置いておきたいと思っているのに。

「それなら・・・それなら・・・」

彼に茶化されたと思ったのか、ルシアが苛立ったように声をあげた。

「あの二年間の噂はなんだったのですか！」

首元にしっかりと抱きついてた腕をほどいて、ラーグを睨みつけてくる。腕をほどかれた事を残念に思いつつも、彼はルシアの目に悲しそうな色が潜んでいることに戸惑った。

「二年間の噂って？」

「お綺麗な方々との秘め事の数々、この王宮にまで届いておりました！」

さあどうだ！とばかりに言い切るルシアに、彼はきょとした顔をする。

「そんな噂流れてたの？何？ここって、よっぽど娯楽に餓えてるの？」

「ラーグ様のお噂だからです！ご自分の影響力の高さを、ちゃんとご自覚下さいまし！」

王子は「ふーん」と感心したのかなんなのか、わからない声をあげた。

「ごまかそうとなさったって、そうはいかないんですから！」

いくら気にしないようにと思っけていても、耳に入る度に動揺をお

さえることができなかった数々の噂。

もし、自分もお遊び程度の気持ちで構われているだけなら？

本当も何もない、おふざけだったとしたら？

そりゃあルシアはただの庶民で、ラーグは大国の王子様。身分違いも甚だしいし、そんな夢を見る方が馬鹿らしいとルシアは思う。

だからといって。

こんなにも、盛大に迷惑をかけられているというのに、それってアリなんですか？

噂を聞いて考える度に、腹が立って仕方なくて、つつい甘いものを自棄食いしてしまったりしたのだ。

これだけ傍迷惑に構われているのに、それが本当にこれっぽっちも心のない、ただのお遊びなんだったら、迷惑かけられたこちらが馬鹿みたいじゃないですか！

そう！ただそれだけなんですから！大体自棄食いしたおかげで、体重が増えていたらどうしてくれるんですか！怖くて量ってないです！

轟々と燃え盛るルシアの心の内を知らず、ラーグは少し考える素振りをした後、見る者を蕩かすような笑顔を浮かべた。

「ルシア、それってヤキモチ？」

さも嬉しげに言う。

「・・・は？」

それは予想していなかった言葉だった。あまりの自己中心的な考え方に、ルシアは哑然とする。

「そうだったのですか！ルシア嬢！」

さらには後方から聞き覚えがありすぎて仕方ない声が、ものすごく驚きました！という雰囲気をただよわせて聞こえてくる。ただし棒読みであるが。

振り返ればそこには案の定、片手で口元を閉じ、もう片手で胸元を握り締めて、驚愕に顔を引きつらせているティルガ・ディキンスがいた。

「・・・ティルガ様。いつからそこにいらっしゃったのですか？」

ルシアの静かな問いかけに、ティルガはすぐさま胸を張って答える。

「さて。かれこれ、いつからになりますかなあ」

「早く正直にお答えいただきませんと、イーシャ様に言いつけます」

「ラーグ様がルシア嬢を押し倒された時には、もうここに控えていました」

と、いう事は、この男はそれからのアレコレをずっと見ていたというのか！

「なぜ助けてくださらなかったのですか！..」

いまだに上にのしかかっているラーグを押しつけ、ルシアは体を起こすとティルガに食って掛かった。

「いや、ラーグ様が目で殺すぞと脅されるもので・・・」
「！！！」

ラーグを振り返ると、同じように体を起こした彼はルシアの視線に爽やかに微笑を返す。

「ここにティルガ様がいらっしゃるのをご存知だったんですか！」

知ってて、あんなこっ恥ずかしい真似をしていたのか！

「それにしてもルシア嬢は大胆でしたねえ。自分から抱きつくなんて、まあ・・・」

「ルシアは柔らかくて気持ちいい上に、いい匂いがするんだよ」
「！！！」

震える彼女を無視して話し出す男どもに、ルシアは胡乱な目を向け懐から丸いなにかをとりだした。銀色の枠に透明感のある青色の宝石をはめこんであるそれは、一見ただのブローチのように見える。ルシアは、その青の宝石に触れると平坦な声で言った。

「イーシャ様、ルシアです。恐れ入りますが、ご足労願えませんでしょうか」

その言葉を聞いて、談笑していた二人は慌ててルシアを見やった。彼女はそれを再び懐に戻すと、にっこりと微笑んだ。

「少々お待ちくださいませ。今すぐにいらっしゃるそうですから」

ルシアが言い終わるか終わらないかのうちに、彼女の目の前に黒い穴が開き、そこから泣く子も黙るイーシャが現れた。

「確か執務室で仕事を片づけていらっしゃるはずのラーグ様が、何故ここにいるのでしょうか？さらにはラナスフィア様の護衛をしているはずのティルガはここで一体何をしているんだ？」

「イ・・・イーシャ・・・」

「兄上・・・」

逃走する機会を逃した二人は、彼の前でただただ固まるのみ。

青の宝石は、イーシャに直通で通じる通信機。日頃ラーグに困らされているルシアを不憫に思ったイーシャが、数年前に手ずから作った魔法具である。通信機能以外にも、ルシアの居場所を知らせる機能がついているので、逃亡すれば、まず間違いなくルシアの元に行くラーグを発見する際にも役立つている。

こうやって実際にルシアがイーシャと通信するのは、今回が実用してから初めてであったが、感度も機能も良好だ。

忙しく働いているイーシャを、こうして呼び出すのは気がひけたが、今回のことは腹に据えかねたのである。

性質が悪いにもほどがあります！

イーシャに怒られている二人を見やって、ルシアは溜飲を下げる。結局イーシャの手を煩わせる事になってしまったが、これでラーグも仕事に戻らざるをえないだろうし、王女もなんとか許してくれるだろう。それに王女は王女で、仕事をサボっていたティルガを叱るのに忙しくなるはずだ。

「ルシア、連絡ありがとう。いつも迷惑をかけてすいませんね。ひとまずラーグ様は僕が引き取ります。ティルガに関しては、僕からラナスフィア様にお伝えしておくから。・・・ティルガ、わかつているな？」

ひとしきり王子と弟を叱りつけたイーシャは、ルシアに優しく声をかけ、ラーグの襟首をつかむ。そして弟に極寒の視線を投げつける。

「はい、兄上！申し訳ございません！」

それを受けて直立不動で立つティルガの顔色は青く、普段の飄々とした姿が嘘のようであった。

「じゃあ、ルシア。後は自分の仕事に戻ってもらって構わないからね」

最後にもう一度ルシアに声をかけると、イーシャは王子の襟首を掴んだまま、でてきた黒い穴へと向かう。

「ありがとうございます。お忙しいのにわざわざご足労頂きまして、申し訳ございませんでした」

「あ、ルシア」

その姿に一礼して微笑むルシアに、ラーグが声をかける。

まだ何か御用でも？と不機嫌に睨みつけると、ラーグは珍しく苦笑して

「あの噂、ルシアには関係ないから。君が気にすることじゃない」

そう言うと、黒い穴へと消えていった。

後には、ラーグの言葉に呆然と立ち尽くすルシアと、嘆息して天を仰ぐティルガのみが残された。

侍女の切り札（後書き）

御覧下さり、ありがとうございます。

ちよっとぐだぐだになってしまいました；

もうちよっとスマートになるとよかったんですけどねえ・・・。

王子様の裏事情（前書き）

遅くなりました！

楽しみに待っていてくださった方がいらっしやると嬉しいです

王子様の裏事情

初めて彼を見た時、その青い瞳に目を奪われた。

紺色に近い、深くて濃い青。

なのに、その色は見る角度や光の差し具合によって色を変える。

見たこともない深い海の底の色というのは、きっとこんな色なんだろうと思った。

* * *

「はぁ・・・」

仕事の合間の休憩時間。控え室にて、同僚達と仕事の愚痴や鬱憤について語り合い、噂話に花を咲かせる憩いの時間。思い思いにかしましくお喋りする同僚達の只中であって、ルシアは一人溜息をこぼす。

「ルシア、それも何回目？朝からずっとじゃない」

同じ席について、ルシアの様子を窺っていた侍女が呆れた視線をよこしてきた。

彼女の名前はココット・イラザイル。ルシアと同じ時期に侍女見習いになった同期で、ラীগ付の侍女だ。その上、使用人寮・ゼツフェル館において相部屋の相手でもある為、同僚達の中でも特に仲

がいい。

貴族達が、髪の毛の長い女性を好む事を知っている侍女達の中では珍しい事に、彼女は栗色の髪を耳の下あたりでぱつぱりと切ったショートカットだ。しかし、その髪型はココットの活動的な雰囲気と、その美貌によく似合っていて、彼女を気に入っている貴族は多い。

「・・・そんなにしてる？」

「うん。朝からずっとね。あ、昨日からずっとかも？」

憂鬱な溜息は、溜息をついた分だけ自分に申し掛かってきて、更に憂鬱にさせる。

わかつてはいるけれど、無意識にでてしまうのだ。

「だーから、早く口に出しちゃいなよ。そうしたらスッキリするって！」

翡翠の瞳を好奇心に輝かせて、ココットが身を乗り出してくる。

「どうせラীগ様が関係してるんでしょ？ルシアが憂鬱そうな時で大抵そうだもん」

「そんな事ないよ・・・多分」

「いや、そんな事あるね。絶対あるね。んじゃ、今日は何が理由なのよ？」

「う・・・」

「ほーら！」

途端に口ごもるルシアに、ココットは勝ち誇った笑みを見せると、紅茶を一口飲む。

「で？」

「うう・・・」

チラリと視線をよこしてくるココットに、ルシアは観念して重い口を開いた。

* * *

「そりゃあ、私には王族様方の華々しいお噂なんて関係ないよ？
そんなのわかってたよ？わかってたけど、あれだけベタベタつきま
とつておいて、人に迷惑かけといて、関係ないからって気にするな
って酷くない？」

「うん」

「別に私に構つてたのなんて、ただの気まぐれだってわかつてる。
私だって本気になんてしてないし。噂だって、ちゃんとしたお相手
ができて、私に迷惑かけないでいて下さるなら、別に好きにしたら
いいじゃないって思うし・・・」

「うん」

「大体、ラーグ様のおっしゃる事なんて、全然信用できないし、す
る気もないし。いっつも本気なのか嘘なのかわかんない人なんて、
面倒この上ないと思うの。それが王子様なんて、身分違いもここに
極まれりよね！からかうのにも程があると・・・」

「うん。わかった。わかったから、ちょっと落ち着こうか？」

ポンポンとルシアの方を叩くと、ココットはルシアと自分のカッ
プに紅茶のお代わりを注ぐ。

「要するに、ルシアはラーグ様に過去の女性達との噂を、君には関

係ない！ってバツサリ切られた事が不満なわけね」

「別に不満じゃないわよ！私には関係ない事だもの」

眉間に皺を寄せて、ルシアはカップを手取る。

「・・・そうよ。リーグ様が、どこで何をされてようとも私には関係ない事だもの・・・」

呟くように言って、お茶を飲むルシアに、ココットは困ったという顔を向けた。

「でも、気になるんでしょ？」

「・・・別に」

ふいと顔を背けるルシアの様子には、ありありと「気になってます！」とでている。

「あのね、私思っただけだよ。リーグ様って、なんか人とはちょっと違うじゃない？」

ココットは、不機嫌なルシアに顔を近づけてそう言うところでしょう？」と同意を求めてきた。

確かにリーグは、普通の人とはちょっと違う気がする。

けれどそれを言ってしまうと、キレると暴走するイーシャや、イーシャの為に無茶をやらかす王女様、嘘ばかりつくティルガはどうなるのか。あれらも立派に変わり者だ。

改めて自分の周囲のちよつと変わった人を頭に思い浮かべてみて、ルシアはげんなりした。

「ほら、見習いだった時にさ。ルシアはいなかったけど、私達、王

族様方に顔見せしに行つたじゃない？」

「ええ。私、あの時熱をだしてしまつたから」

王宮に仕える者達は最初に王と面会し、それから篩いにかけてある程度使い者になると認められた者達だけが、他の王族達と面会する。

ルシアは使い者になると認められたものの、面会日の前日から熱をだしてしまつて面会には行けなかつたのである。それで後日一人だけ面会する事になってしまつて、酷く緊張したのだ。

「それでさ、ラナスフィア様とかはさ、につこり笑顔で煌びやかに、そりやもう舌足らずの可愛い声で『よろしくお願いしますね』っておっしゃって下さつただけで、ラーグ様だけはお人形さんみたいに黙りこくつてたまんまだつたのよ」

「そうなの？」

ルシアの印象ではラーグはいつも笑っている時が多く、真面目な顔をしている方が稀なので、ココットの話は意外に思えた。

「そうなの。なまじあれだけ綺麗なもんだから、ちょっと怖かつたもんよー？」

「想像つかない・・・」

「まあルシアの前では始終、笑つていらつしやるものね」

「そうね・・・え？ちよつともしかして？」

「そう。今もそうなのよ？」

ラナスフィア様とかご家族様方と一緒にの時と、イーシャ様やティルガ様が一緒にの時はまた別みたいだけどねー。

そう言つてお茶菓子のクッキーをつまむココットに、ルシアは驚

きの眼差しを向けた。

「ええ？私、そんなの知らない！」

「そりやそうよ。あんたの前じゃ別人だもの」

ラーグと一緒にいる時は、彼をどうにかする事で必死だし、いらないないで、邪魔される前に早く仕事を片づけようと必死になっているので気づかなかった。それに言われてみれば、ラーグがロシア達以外と一緒にいる所など滅多に見た事がない。彼には大抵イーシャがついていたし、そうでなければ一人でいる事が多かった。

「ラーグ様、絶対ロシア以外の私達の名前知らないわよ。賭けてもいいわ。だって何年もお側付やつてるのにラーグ様から、名前呼ばれた事なんてないもの！どうよ！」

「そこは威張るところなの・・・？」

えっへんと胸を張るココットに、ロシアは呆れの視線を送るが、彼女の言う事が意外で仕方なかった。

ロシアの印象では、ラーグは人懐っこい人間だった。

ラーグと最初に出会った時、彼の方からロシアを遊びに誘ったぐらいなのだから、てつきり彼はそういう人見知りのしない、人懐っこく笑顔の絶えないタイプだと思っていたのである。まあ性格に難がある事は、出会ってすぐにわかったけれど。

「だからさー？」

「え？」

ココットは、再びクッキーをつまみ、それをロシアに向けながら穏やかに微笑んだ。

「あんたの事、かーなーリー気に入ってると思うのよ？関係ないって言葉の真意はわかんないし、本当にどう思ってるのかなんて、本人にしかわかんないけどさ。からかってるってのだけは、あたしは違うと思うのよ」

そう言って、クッキーをサクツとかじった。

「ラーグ様はさ、自分の興味のあるなしを、ハッキリ分けるタイプじゃない？興味のあることには真っ直ぐズドン！だけど、ない事には最っ高に無関心。ある意味わかりやくはあるよねー」

あははーと笑うけれど、まさに興味のあることに分類されているだろう我が身を振り返ると、ルシアはなんとなく笑えない。

「案外、噂の真相もそうだったりするのかもって思わない？」

「どういうこと？」

「言い方悪いけど、本人にとっては取るに足らない瑣末な事って思ってるから、噂になってようが気にもしないし、ルシアにも大した事じゃないから気にする事じゃないって言うのかな、と」

「・・・よく、わからないわ」

そうなのだろうか？

彼にとっては、女性達と繰り広げたあの秘め事の数々は、取るに足らない出来事で、少しも関心のある事ではなかったのだろうか？

でも関心がないとすれば、どうしてそんな事をしたのか。

大体取るに足らないって、相手の女性達にとって失礼ではないのか？

「ルシア、眉間に皺」

コcottに眉間をグイツと押されて、ルシアは我に返った。

「と、とにかく！私には関係ないんだから！」

彼女の言葉によって、少し自分の気持ちが悪くなった事がわかったが、ラーグが普段どうだろうと、どういう考えを持っているだろうと、ルシアには関係がないのだ。

関係ないったらないのだ。

「そー？随分、気にしているようですけどねー？」

コcottがニヤニヤと笑いながら、声にださずに「た・め・い・き」と呟く。

「もう！うるさいの！」

真面目にラーグを擁護していたかと思えば、打って変わってからかい始める同僚に、ルシアは拳を振り上げ追い掛け回し、結果アドリー侍女長に「落ち着きがありません！」と怒られてしまったのだ。

妹、強襲

「お兄様！ちよつと失礼いたします！」

ルシアが溜息を量産させていた頃、ラーグは執務室にて、妹の強襲にあっていた。

「いらつしやいませ。ラナスフィア様。本日はどうなさったのですか？」

「ああ、イーシャ。ご機嫌いかが？お仕事中なのに、お邪魔をしましてごめんなさい。少しの間、お兄様をお借りしたいのですけれど、よろしいかしら？」

「ええ。構いませんよ。昨日あらかた急ぎのものは終わりましたからね」

ラナスフィアが、イーシャに向けて可愛らしく微笑むと、イーシャもそれに笑い返す。そんなほのぼのとした二人の空気に、不思議そうな声が割つてはいる。

「ねえその二人。僕の意見は無視なの？」

執務机から頬杖をついて、二人を見上げるラーグに、ラナスフィアは先程とは打って変わった冷たい目を向け、

「お兄様に選択肢なぞありませんわ」

きつぱりと言い切った。

「あ、そう。まあ別にいいけどさ。で？何の用？」

妹のつれない態度に大して気分を害した様子もなく、ラーグはゆったりと椅子に背をもたれかせる。イーシャは控えていた侍女に、兄妹の分のお茶を出すよう指示すると、ラナスフィアをソファアーに座らせ、自分はラーグの後ろに控えた。

ソファアーに座った王女は、体を斜めに据えて兄を見やり、その後ろにはイーシャと同じようにティルガが控える。まもなく、お茶を持って侍女が帰ってきたが、彼女は全ての準備を終えると、そくさと逃げるように部屋をでていつてしまった。その姿が扉に消えて、しばらくしてからラナスフィアは口を開いた。

「お話というのは、昨日のことです」

「昨日？」

「ええ。昨日はよくも、わたくしを騙してくださいました」

「誰だって、咄嗟に気が回らないって事はよくある事だよ、フィア」
「それをお兄様の口から聞かされる筋合いはないですわ・・・」

にこやかに見当違いの台詞を言うラーグに、妹は頭を押さえて苦い声で返し、ティルガは無言で頷き、イーシャは、苦い顔をしている。

「・・・もういいです。それで本題はここからです。昨日あった件は、全てティルガから聞きましたわ。」

お兄様は、ルシアに、研修地へ行っていた間の噂を、彼女には関係ないとおっしゃったそうですね？」

「そうだけど？」

気をとりなおして、再び鋭い声で詰問を始める妹を、ラーグは不思議そうに見やると、それに肯定を返す。

「なぜ、そのような事をおっしゃられたのです？」

兄の返答を聞いて、妹の声が一段低くなる。それに気がついてい
るだろうに、ラーグは反応するわけでもなく用意されたお茶を、ゆ
っくりと飲んだ。

「なぜって。本当にルシアには関係ないことだからね。大体もう過
去の話だし」

十分にお茶を堪能しつつ、「ルシアが入れてくれるお茶の方が美
味しいよね」とこぼす兄に、ラナスフィアと双子は呆れた視線を向
ける。

「それ、本気でおっしゃっているんですよね？ラーグ様」

イーシャが確認するように問うが、彼とて自分の主人が本気で言
っている事は痛いほどにわかっていた。

しかし、日頃あれだけルシアに構っておいて、自分の女性関係を
「関係ない」の一言で終わらせるとは、それはちょっと酷いのでは
ないだろうか？

「だって、関係ないでしょ。僕が誰とどうしてようが」

お茶のカップをソーサーに返して、ラーグはきょとした顔を
している。

いや、確かにルシアとラーグは恋人関係にあるわけではないから、
関係ないと言えばそうだ。

だが、それではルシアがあんまりなのではないかと、ラナスフィ
アは声を荒げた。

「そういう問題ではないでしょう?!」
「なぜ?」

憤るラナスフィアを、ラーグは心底わからないといった風に首をかしげる。

「ラーグ様」
「なに? テイルガ」

それまで黙りこくっていたティルガが、指を一本指し示す。

「もしもの話ですよ?」
「うん?」

「あるコック見習いの少年が、ルシア嬢に花を渡したとします」
「・・・うん」

「ルシア嬢がお礼を言つと、彼は照れたように笑って彼女に『次の休みに一緒にどこかに行かないか?』と誘いをかけます」

「へえ?」

「ラーグ様、笑顔が怖いのですが? あくまでも、もしもの話なのですよ。これは」

「失礼な奴だな。わかってるよ。で?」

「ラーグ様は、この事をお知りになったらどうされますか?」

「どうするって・・・ルシアに聞くね」

話の水を向けられたラーグは、さも当然のようにそう言い、それを聞いた三人は、心の中で快哉をあげた。

「ルシア嬢のことです、やはり気になるでしょう? そうでしょう?」
「そうですね、ルシアの事ですものね。気になるのは当然だと

「思いますわ」

「ルシアが他の男と出かけるのですから、気になるのは当然だと思いますよ」

「・・・なんなのさ」

一気に詰め寄ってきた三人に、ラーグは困惑して身を引く。

そんな事より、話の続きはどうなったんだと目線でティルガを促すと、ティルガは空咳をしてから続きを話し出した。

「そこなのですよ、ラーグ様」

「どこ？」

「もしラーグ様が、ルシア嬢にその件について聞いたのだとして、『ラーグ様には関係ございませんから、お気になさらないで下さいませ』と答えられたら、どうお思いになりますか？」

「ルシアの口真似、上手いね」

「お褒めの言葉はありがたく頂戴します。しかし、今の注目点はそこではないのですが・・・」

ラーグの発言に、いささか脱力感を漂わせながらも、ティルガは追求の手を緩めない。

ここからが肝心なのだ。ラーグがルシアと同じ立場に立ったと想像してみても、どう感じたか。口で上手く説明できないことならば、自分で考えさせてみればいいのだ。

ラナスフィアもイーシャもそう思ったからこそ、この場をティルガに任せている。

さあ、考えてください。ラーグ様。

妹と乳兄弟からの熱烈な視線に、ラーグは多少戸惑ったものの、首をかしげてしばし考え込むと、

「別にどうもしないね」

表情も変えずに、あっさりと答えた。

「は？・・・どうもされないの？」

「うん。実際ルシアがどうしようと、それはルシアの問題であって僕のじゃないからね。関係がないって言われたら、それまでかな」

ルシアに嫌われたくないし、と言いながらラーグはカップを手にとり紅茶を飲む。

いやいや、ちょっと待て？そういう問題か？最初からそういう問題なのか？

あまりにも平然とラーグがそう言うものだから、ティルガまでが混乱してくる。

「ちょっとお待ちくださいますか？ラーグ様」

混乱してきたティルガはそう言うと、「集合！」と声をかけて、王女と兄を部屋の片隅に集める。ラーグの言葉に同じく愕然としていた二人は、素早く部屋の隅に集まってきた。

「ちょっと！ティルガ！どうなっているの？お兄様、全然わかっていらっしやらないじゃない」

「いや、それを俺に言われましても・・・」

王女に責められるが、ティルガだってまさかああ返してくるとは思わなかった。普通好きな相手が、他の相手と噂になっていたら気

になるだろうし、それを関係ないとスッパリ切られたら傷つくだろう。

「ティルガの例は悪くなかったと私は思うよ。でもラーグ様がね・・・」

「本当に気にならないのですかね？ラーグ様は」

「わたくしだったら、イーシャが他の方と噂になりでもしたら気が気じゃありませんし、それをイーシャに関係ないなんて言われようものなら死にたくまりますけど・・・」

そんな事を、ぼそぼそと呟くラナスファイアの様子にイーシャはぎよっとする。

「・・・ラナスファイア様、けしてそんな事申しませんので、早まつた事はなさらないで下さいね？」

「大丈夫ですわ、イーシャ！わたくし死ぬなら、あの北にある物見の塔の上から身を投げようと考えていますの。あそこなら下がお花畑ですから、目にも優しいですわ」

「いえ、そうではなくてですね？ラナスファイア様？私の言葉が聞こえていらつしやいますか？大体目に優しいってなんですか？」

「ラナスファイア様・・・実は兄上にも・・・」

「何を嘘八百並べ立てようとしている！ティルガ！」

「あのさー。いつまで待てばいいの？」

脱線していく会議は、痺れを切らしたラーグの一声によって中断する。

そう、今はラーグとルシアの話なのである。

しかしラーグがルシアの立場にたって考えてみてわからないと言われてしまえば、後はどう説明すればいいのかわからない。これは、感情の問題なのだから。

いくらルシアがラーグの言葉に傷ついているのだと言っても、それが理解できなくては意味がない。

「ラーグ様、本っ当に、気にならないのですか？ルシア嬢のことなのに？」

「僕には関係ないからね」

「そうですか・・・」

これ以上言っても、堂々巡りになるだけだ。そこはかたなく疲れを感じて、三人は項垂れた。

「お兄様って昔から歪んでましたものね・・・」

ラナスフィアが小さく呟く声に、双子はもつともだと深く頷いた。

* * *

結局、ラーグに上手く説明できないままに、仕事の時間が迫ってきてしまった。

ラナスフィアは非常に残念な思いと悔しい思いを抱えたまま、テイルガを連れて、兄に退出の言葉を投げかけた。

「お兄様、もう少しこの件についてはお話したく思いますけれど、時間がきてしまいましたので、これで失礼致します。また参りますから」

「よくわからないけど、いつでもおいで」

生真面目な顔をしている妹に、ラーグはひらひらと軽く手を振る。

そしてティルガを見やって

「あ、ティルガはちょっと待って。聞きたい事があるから。代わりにイーシャがフィアを送ってきて」

そう言つと、ティルガを手招きする。

「はい。了解しました」

「まあ！イーシャ。お部屋まで一緒に来てくれるの？」

「そんな手離しで喜ばれると、俺の立場がないのですが・・・」

楽しそうにイーシャにエスコートされて出て行くラナスフィアに、ティルガは胡乱な眼差しを送ると、渋々といった様子でラーグの側へやってきた。

「何の御用です？」

「さっきの話の見習いは誰？」

その場が静寂に包まれた。

「もしもの話と言ったでしょう？ラーグ様は心配性ですねえ」

ティルガは、にこやかに答えた。ラーグは手元のカップの縁をなぞりながら、乳兄弟を見上げる。

「もしも・・・ね。で、それは一割の真実なのかな。それとも違うのかな？」

「・・・もしも、そんな事があつたとしたら・・・という仮定のお話ですよ？」

ラーグは、その答えに青の瞳を細めると、

「ふーん。まあ、どっちでもいいけど」

全員辞めてもらえば、後腐れないしね。

口元を軽くあげて、楽しそうに呟いた。

「それは非常に困る事になると思いますけどねえ・・・」

目を細めたまま、王子は答えない。

教えなければ、厨房に勤める者全員を辞めさせると言われて、テイルガは大きく溜息をつくと、白旗を上げた。

「わーかりました！そうですよ、さっきのは一割の真実ですよ。でももうその男には、暇を与えてやりましたからご心配なく！」

後ろ髪をかきながら、なかば投げやりにそう言うテイルガに、ラーグは真っ直ぐに視線を向ける。

「本当に？」

「ええ。あの男はルシア嬢のためにはなりませんからね。さりげない理由をでっちあげて追い出しました」

その言葉に視線をはずし、「そう」とだけ静かに呟く王子を、テイルガは油断なく見据えた。

ラーグはルシアに近づく男を嫌う。それはルシアが好きだから、誰にもとられたくないと思うからだろう。

その気持ちはわかる。テイルガだって、好きな女に近づく害虫は

消してしまいたいと思う。

では、なぜ先程の話では、あっさりと引き下がる？

言い寄った男を追放したいと思う程に執着しているくせに、『自分には関係ないと言われたらそれまで』などと言えるのか？

『お兄様って昔から歪んでましたものね・・・』

先程の王女の言葉が耳に蘇る。

執着しているのに、突き放す。
突き放すのに、執着する。

この王子様は、一体何がしたいのか。

つい自分の考えに没頭してしまったティルガは、不意に間近にラ
ーグの顔がある事に気がつきのけぞった。

「ねえティルガ」

彼の顔を覗き込むようにして、王子は笑う。

「とりあえず、今のがお得意の嘘だったら、お前は三ヶ月間、訓練
場勤務だからね？あ、後、僕に黙ってた罰で半年ほど訓練場勤務ね
？」

「本当ですって！天龍に誓って本当ですって！勘弁してくださいよ
！大体黙っていたって言ったって、ルシア嬢は全く相手にしていま
せんでしたから、報告する必要はないと思ったのですよ！」

「独断専行反対。報告・連絡・相談は徹底しないと、いくら強固な

絆があっても脆く崩れちゃうもんだよ?」

いつそんな強固な絆を築いた?!

先程よりも、更に楽しげに微笑むラーグに、ティルガはげんなりする。

「本当勘弁してくださいよ!」

結局、それから三日間、ティルガは訓練場に缶詰にされたのだった。

もしラーグ様がルシア嬢と決定的にこじれたとしたって、俺はもう知らん!

と、ティルガが思ったのかどうかは、誰も知らない。

妹、強襲（後書き）

御覧くださりありがとうございます！
イーシャに送ってもらった王女様は、その後ウキウキだったそう。

ティルガの災難

その日、ルシアが王女の部屋へ入ると、やけに王女はご機嫌であった。

「姫様、今日はとてもご機嫌が麗しいようですね。何かいい事でもございましたか？」

いつも華やかな王女の雰囲気さらに華やかになっていて、見ているこちらは何やら浮かれそうになってくるほどだ。

「ああ、ルシア。そうなの。とってもいい事なのよ」

弾んだ声で返してくるラナスフィアの様子に、「さてはこれはイーシャ様が何かおっしゃったのかなあ」とルシアは考える。

いつだって、この王女の機嫌を左右するのはイーシャの存在なのだ。今回もきつと彼が関係しているのだろう。

そう当たりをつけると、ルシアはふと違和感に襲われた。

部屋の主とは違って、いつもと全く変わらない王女の部屋。周りを見渡してみても、特におかしな所はない。

気のせいかしら？ なにか足りないような・・・。

そう思いながら、王女に視線をやって、ルシアはやっと気がついた。

背後霊のように、いつも王女のお後ろに控えているティルガがいないのだ。

「姫様、ティルガ様がいらっしゃらないようですが、どうかされましたか？」

「やっと不審に思った点を理解したルシアが、そう王女に問いかけた瞬間。」

「遅いじゃないですか！」

「勢いよくルシアの背後の扉が開かれるとともに、件のティルガが飛び込むように入ってきた。」

「ティルガ様？」

「俺がいない事に瞬時に気がついてくださいよ。ルシア嬢」

彼は背後を気にするようにしながら小声で非難してくる。

「まあ！ティルガ！お前、逃げてきたの？」

目を丸くしているルシアと同じように、驚いていた王女が我に返って眦をつりあげると、ティルガはそれをさらに上回る迫力をもって彼女に迫った。

「ラナスファイア様、酷いですよ。俺がどれだけ嫌かご存知でしょう？！あんな人を使ってまで！」

「だって仕方ないじゃないの！」

「何が仕方ないのですか！何が！」

「ええい！うるさいわ！お前は、命令された通りにすればいいのよ！」

「そんな横暴な！」

「お二方、落ち着いてくださいませ！」

そのまま言い合いを始めてしまう二人にルシアは、事情がわからないながらも慌てて止めに入った。二人が言い合いをする事は珍しくもなんともないが、今回はなぜか二人とも迫力が違うのだ。

「一体どうされたのですか？」

ルシアが交互に二人を見やると、ティルガが勢いよく話し出す。

「どうもこうもないですよ。ルシア嬢。ラナスフィア様が、俺に訓練場に行けとおっしゃるのですよ」

「お行きになつたらいいじゃないですか？」

「ルシア嬢まで、そんな事を言うのですか！」

ティルガはそう嘆くが、護衛官が訓練場で、その腕を磨いたとしてもおかしくもなんともない。何をそんなに嫌がる事があるというのか。訓練場には、特訓大好き無茶ぶり大好きのだルガ將軍がいる事を知らないルシアは、ティルガもサボリ癖がでたのかと呆れるばかりだ。

「そつよ！男なら黙ってお行きなさい！」

ルシアの賛同を得て、王女は俄然声を張り上げる。が、どこかその様子が不自然だった。

「姫様、どうしてそんな事をお命じになられたのです？」

今まではそんな事など命じたがないのに、なぜ突然訓練に行けなと言っのか。

そう聞くと、王女は目を泳がせる。

その様子は断然、怪しい。

「姫様？」

ルシアが目を細め、ティルガが苦い顔をして王女を凝視すると、王女は観念したように白状した。

「お兄様が・・・」

「ラーグ様が？」

「ティルガを三日間訓練場にやったら、代わりにその間イーシャをよこして下さると・・・」

売った！この人、自分の護衛売っちゃいました！！

そんな感想がルシアの脳裏を横切ったが、彼女はそれを受け流して胡乱な目つきで王女を見やってから、ティルガに視線を移す。

「何かやっただんですか？」

「やったかやっていないかといえば、やっていないですよ。俺は無実です」

「ああ、嘘ですよね」

「この上もなく真実だというのに、なぜ？！」

「だってティルガ様の真実は一割なんでしょう？」

「ご自分でおっしゃったのに、もうお忘れなんですか？とバツサリ切って捨てられ、ティルガはガツクリと肩を落とす。

「ああ・・・もうラーグ様もルシア嬢も可愛くないですね・・・」
「ラーグ様と同列にしないでいただけますか？」

ルシアはティルガに冷たい目を向けるとそっけなく言った。その様子が常とは違うことに気がついて、王女と護衛は改めて彼女を見るが、特に変わった様子は見受けられない。

「今日はいやにお兄様に冷たいのね？」

窺うように問うと、ルシアは「そんな事はございません」とにべもない。

ああ、やはりこれは昨日問い詰めたラーグの発言が関係しているのだろうなあと二人は視線で会話があった。

「失礼いたします！ラナスファイア様！」

そこへ、今度は足音も高らかに大勢の兵士が乱入してきた。

「今度は一体なんなんですか・・・」

「ティルガのお迎えよ、きつと」

「俺は行かないと申しているでしょう！」

どうして朝からこんな騒ぎになるのかと、ルシアは疲れを覚えるが、その兵士達の海を真つ二つに割って部屋に入ってきた人物を見て顔をしかめた。

「やあ、ルシア。おはよう、今日も可愛いね」

艶やかな黒髪を陽光に輝かせ、しごく爽やかに挨拶してくるラーグに黙って一礼をかえす。

「お兄様、この部屋の主はわたくしですが？」

ここは王女の部屋なのである。王女の言う通り、部屋の主を差し置いて侍女に挨拶しないでほしい。さらには、さりげなく手をとって口付けしようとするのは、是が非でもやめてほしい。

そんな思いをこめてラーグを見るが、彼は有無を言わせぬ力でルシアの手をひきよせると、その甲へ軽く口付け、にっこりと微笑みかけてくる。全くもって普段通りの彼の姿に、彼の言葉に動揺していた自分が馬鹿みたいに思えてきて少し悲しくなった。

ラーグはそのままルシアの手を握り締めたまま、妹に視線を向ける。

「おはよう、ファイア。そうは言うけど、ルシアがいるならルシアが最優先だよ。ファイアだってそうでしょ？」

今ここにイーシャはいないけど、いたら僕なんて後回しでしょ？

にこやかにそうのたまう王子に、王女は「確かに」と頷く。頷いてしまう。

なんですか、その自分ルール！

その場にいた兄妹以外は、全員そう思ったに違いないと、ルシアは自分の掴まれた手を見ながら思う。そつと力をこめて、ゆつくりと手を引き抜こうとするが、痛くない程度に強く捕らわれている手は取り戻せそうにない。

「ラーグ様、手を離していただけませんか？これでは仕事ができません」

「じゃあこのまま手を繋いでいるのと、抱きしめられるのと、どっ

ちがいい？僕は抱きしめる方かな」

それって拒否権ないじゃないですか！どっちもどっちですし！

非難するように睨むルシアだが、ご機嫌な王子様には敵いそうに
もない。

「どちらもちよつと・・・」

「じゃあキスする？」

「ええ?!」

「お兄様!!」

跳ね上がったハードルに目を白黒させるルシアを見かねた王女が、
咎める声をだす。

ラーグは「残念」と呟くと、やっとルシアの手を離してくれた。
すかさずルシアは王女の後ろに隠れ、ラーグから手が届かないであ
るう位置に陣取る。心臓の鼓動が激しく高鳴り、彼女は胸を押さえ
た。

びっくりしました。本当びっくりしました！あの人は本当何てこ
とをおっしゃるのか！

頭の中でラーグの発言がグルグルと回る。

あんな風に真正面から言われた事などなかったので、免疫ができ
ていなかった。しかも気のせいであって欲しいと切に思うが、目
が笑っていないかった気がするのだ。

彼とてこんな大勢がいる前で、本気なわけがないと思う。思う
のだが、彼ならやりかねないという一抹の不安がある。備えあれば
憂いなしとはよく言ったものだ。あの王子様に対しては、用心する
にこした事はない。

そう結論づけて、真っ赤な顔と警戒の眼差しで自分から素早く離れていくルシアを、にこやかに見送ってからラーグはティルガに向き合う。

「それで？ティルガはなんでここに居るの？お前は今日から訓練場勤務でしょ」

微笑みながら優雅に首をかしげる王子様を、ティルガは苦みばしった顔で睨む。

「俺は嫌です」

「拒否権はなし。大体半年にしたいところを三日でいって言うてるんだから、僕の温情に感謝しなよね」

そのどこが温情なのか、ティルガにはさっぱりわからないし、わかりたくもない。わかるのは、王子様が大変楽しそうな様子であることだけだ。

「大体フィアもいって言うてるし」

ラーグがそう言った瞬間、ティルガは勢いよくラナスフィアの方を向く。その目は鮮やかに「裏切り者！」と言っていた。その刺すような視線に、王女は悲しげな微笑みをたたえて言った。

「お前とイーシャ……どちらも大切だけれど、わたくしには一人しか選べないのよ……許してちょうだい」

違う場面で聞いたなら、その美貌もあいまって心打つ切ない台詞であったかもしれないが、今この場で聞く限りでは、とっても腹の立つ発言にしか聞こえない。

「正直に、兄につられたのだとおっしゃったらいかがですか？」

「イーシャにつられました！」

早口で言いきり、これでどう？と一転して勝ち誇った笑顔を浮かべる王女に憎悪を覚えるのは、ティルガの忠誠心が足りないのだろうか？

いやいや、当然の反応だろう。誰が許さずとも、俺が俺を許す。

「俺の人権はどうなるのですか！」

「人権？あつたつけ？そんなの」

「嘘をつく権利なら与えたじゃないの」

「嘘をつくのには権利が？！」

兄妹の言葉に、ルシアが驚きの声をあげるが、驚く場所が間違っている。

「驚くところはそこじゃないでしょう！ルシア嬢！」

悲鳴のようなティルガの言葉に、ルシアは手で口を押さえてから「申し訳ございません」と頭を下げた。ラーグがそれを見て目を細める。ラーグの事だから、てつきり何か言われるものと思いき身構えたティルガの思惑に反して、王子は何も言わなかった。その代わりに両手を打ち叩く。それを合図に部屋にいた兵士達がティルガの周りを囲い込む。

「さあ。楽しいダルガ將軍の訓練だよ、ティルガ」

目が笑っていません！ラーグ様！

いくらティルガといえど、この人数に加えてラーグが相手では分が悪い。しかもここは王女の部屋である。へたに大暴れしてめちゃくちやにってしまったては後が怖い。

逃げ場を失ってしまったティルガは、潔く諦めの溜息をついた。

「お兄様、イーシャはどこですか？」

そんな彼を尻目に王女は、ラーグに詰めよっている。

ああ、その可愛い表情の何と憎いことか。

「ラナスフィア様は、そればかりですね・・・」

「だって三日間はわたくしのものなのよ！」

どこまで、うちの兄が好きなのだと言わんばかりのティルガの呆れ声に、王女は弾んだ声で答える。

浮かれすぎにもほどがあるだろう！

心の中で叫びながら、ティルガは部屋の外にいた兵士も加わって大所帯になった彼らに囲まれ、訓練場に連行されていた。その時の彼の耳には、ダルガ將軍の高らかな笑い声が響いていたという。

ルシアはその後姿を、売られていく仔牛を見るような目で見送ると、大きく溜息をついた。

ティルガの災難（後書き）

お待たせしました。ティルガがイジられキャラと化しております。
多分、幼馴染ズのピラミッドでは彼は下位ですw
お兄ちゃんにも妹にも王子にも弱いですからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333m/>

Colorful

2010年10月10日00時24分発行